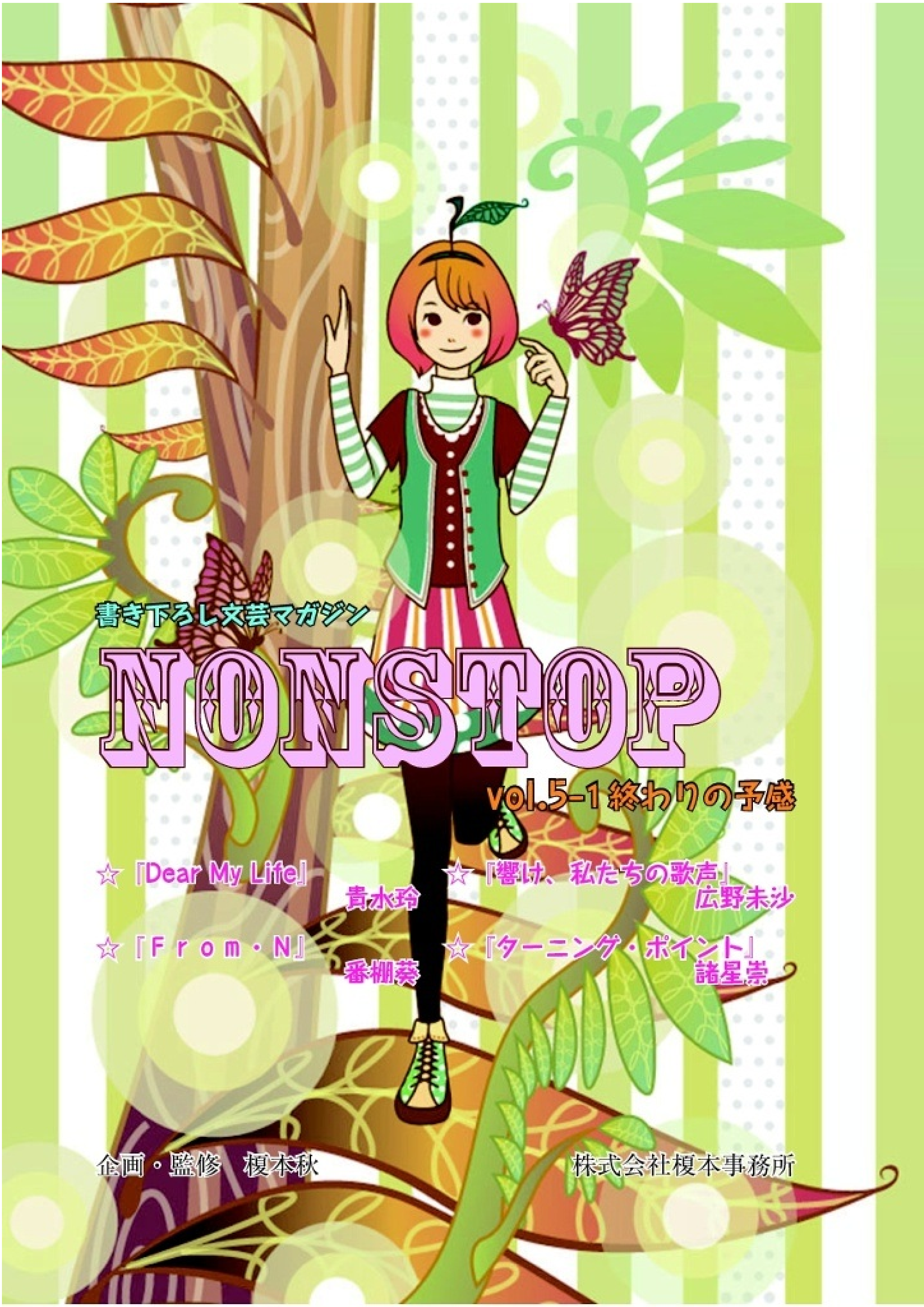
書き下ろし文芸マガジン
NONSTOP
vol.5-1 終わりの予感
☆『Dear My Life』
貴水玲
☆『響け、私たちの歌声』
広野未沙
☆『From・N』
番棚葵
☆『ターニング・ポイント』
諸星崇
企画・監修　榎本秋
株式会社榎本事務所


書き下ろし文芸マガジン
NONSTOP
vol.5-1 終わりの予感
☆「Dear My Life」
貴水玲
☆「響け、私たちの歌声」
広野未沙
☆「Ｆｒｏｍ・Ｎ」
番棚葵
☆「ターニング・ポイント」
諸星崇
企画・監修　榎本秋
株式会社榎本事務所

はじめに

書き下ろし＆ 読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の第5―1号をここにお届けする。第5号は八つの作品を二回に分けてお送りし、今回はその一回目となる。

本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「N市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。

これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。今回の表テーマは「終わりの予感」。それぞれの物語が佳境に入っていくことを匂わせるテーマとなっている。また裏テーマとして季節は「冬」に統一している。

二つのテーマの統一という事情から、先行する弊事務所発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号より順繰りに追いかけていっていただきたい。損はさせない出来のつもりである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計八名が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎回イラストコンペを開催していただき、その上位作品を表紙あるいは口絵として収録するという試みもさせていただいている。作品ごとのカバーイラストについては、これとは別に創刊時にコンペを行って選ばせていただいた。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

榎本秋

目次

はじめに …… 2
目次 …… 3
口絵 …… 4
イラスト　井上真紀子
　ヒトエ
　（掲載順）
舞台設定 …… 6
〈タイトルクリックで該当のページに飛びます〉
Dear My Life　貴水玲 …… 7
イラスト　ヒトエ
From・N　番棚葵 …… 39
イラスト　伊藤由希
響け、私たちの歌声　広野未沙 …… 73
イラスト　うらら
ターニング・ポイント　諸星崇 …… 105
イラスト　橘ぽん
鑑賞 …… 127

Illustration: 井上真紀子

VII
Illustration: ヒトエ

舞台：N市

☆海に面した盆地上の小都市

○海 -> 山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前に大きめのショッピングモールができたばかり

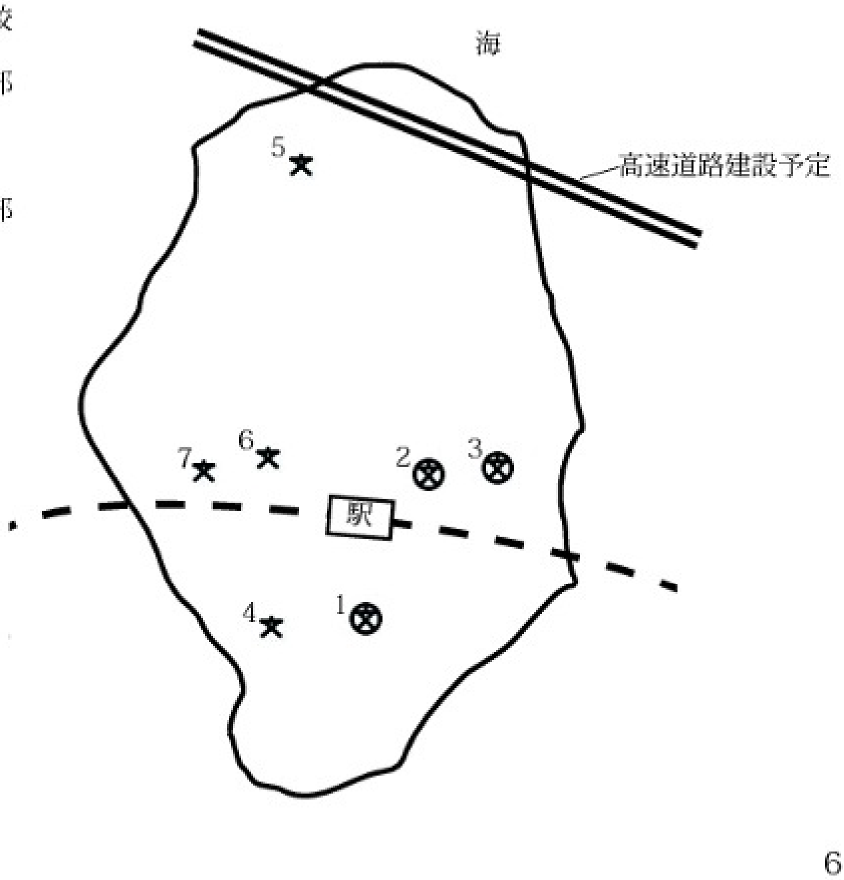
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で揉めている

1→市立中央高等学校
2→昇星学院高等部
3→優華女学院高等部
4→市立第一中学校
5→市立第二中学校
6→昇星学院中等部
7→優華女学院中等部



Dear My Life
貴水玲
Illustration: ヒトエ

あらすじ＆登場人物紹介

あらすじ

　母の勧めでＮ市の優華女学院高等部に入学した花は自分とそっくりな旧家の娘・ありさと出会う。父方の親族との確執、噂や学校でのいじめ、初めての友達、王子様のような星流と過ごした夏休み……様々な出来事を通して花は新しい自分を見つけて行く。やがて対立していた従姉のありさとも少しずつ心が通い始めるが……。

十河　星流
（そごう　すばる）

高二。政治家一族の息子で女子に人気が高い。

西野　花
（にしの　はな）

高一。何事にも一生懸命な、素直で心優しい少女。

塚本　ありさ
（つかもと　ありさ）

高一。プライドが高く利己的な旧家の娘。

＋

西野　咲
（にしの　さき）

花の母親。東京でクラブを経営している。

第五話　うそとほんとうの気持ち

『……そっか。やっぱり、会ったのね』
　小さなため息の後、咲はしばらく黙りこんだ。携帯電話越しに流れる沈黙の中、花は次の言葉を待った。
　まるで裁判の判決でも待っているように気持ちは張り詰めていた。でも勇気を出したことを花は後悔していなかった。
　このＮ市に来てから起こったことを、花は咲にすべて話すことにした。
　塚本家の門を出た時から決心は生まれ始めていた。それからしばらく考えて花は答えを出し、学校が終わるやいなやすぐさまアパートに帰って咲に電話した。何から話していいか、どこまで話すべきか——悩んだけれど、結局すべてを話したのだった。
『……ごめんね、花』
　からっぽになった花の胸に、涙ぐんだ呟きが落ちた。
　窓に映る空の色はいつの間にか夕焼け色から闇色に変わろうとしていた。薄暗い部屋に制服姿で座り込んだまま、花はこみあげてくる熱を飲み込んだ。

『辛い思い、たくさんさせちゃったでしょう？　……ごめんね、何も話さなくて』
　咲の声はひどく後悔しているのがわかるように沈んでいた。小さく首を横に振る。でもそれでは届かない——目頭に浮かんだ涙を制服の袖で拭いて花は口を開いた。
「いいの、きっと理由があるんだろうって思ってたから……。ママを責めたいんじゃない。でも知りたいの、パパのこと。なんでパパの家族が私たちを憎むのか。全部知りたいの」
大切なことだから。そうでないと堂々と胸を張って自分らしく生きるなんて無理だ。だからちゃんと知らなければ——自分のこと。家族のこと。
『そうだよね、本当なら話すべきだったよね……。わかったわ、全部話す』
　そう言って咲は穏やかな口調で話し出した。
『ママとパパは、高校生の時出会ったの。ママが優華に入学した時、パパは昇星の三年生だった。あたしの頃も合同の新入生歓迎会があってね。そこであたし、同級生とケンカしてね問題起こしちゃったの。その頃優華は外部受験者ってほとんどいなかったのよ。みんなエスカレーターに乗ってきたお嬢様ばかりでね。施設育ちの特待生ってだけでいいカモだったのよね。いじめの』
「いじめ？　ママが？」花は驚いて声を上げた。
『そうよ。でもただではやられなかったわ。もともとあたし気が強かったから。歓迎会の日もくだらない嫌がらせされてね、食ってかかったの。そしたら相手が泣いちゃって大騒ぎ。みんなに白い目で見られるし、教師には一方的に怒られるし。誰もあたしの味方なんてしてくれなかった。そんな時助けてくれたのがパパだったの。みんながあたしを軽蔑の眼差しで見てる中、あの人は「僕だって同じことすると思う」なんて庇ってくれたの』

――え……。

それはまるで、自分と星流の出会いのようだと思った。まさか母と非父の出会いも同じ場所だったなんて。

『それから顔を合わせると声をかけてくれるようになって……でも相手は地主の息子で将来有望な優秀な人だったから、出来るだけ避けてた。あたしの母親はけっこう有名なドランカーで、悪い噂もたくさんあったし、関わらない方がいいと思って。でもあの人あたしにちょくちょく会いに来た』

「じゃあ、パパからママにアプローチしたの？」

まじめで穏やかそうな写真の中の姿からは想像できなくて花は思わず顔をほころばせた。

『そうよ。そりゃもーしつこかったんだから。もう来ないでって怒ったこともあったわ。でもパパったらあきらめなくて、あたしもいつのまにか何を言っても穏やかに笑うパパのそばが心地よくなった。あの人の前だけでは本当の自分でいられたの』

「それでつきあうようになったの？」

『ううん、そう言われたけどあたしは断り続けたの。塚本の人たちも反対してたし。卒業したらすぐN市を出ていくつもりだったしね。だけど、黙って出て行ったあたしをあの人追いかけてきたの。一流大学もやめて、家族も捨てて、あたしのために』

いったん言葉を切り、咲はふうと息をついた。

『それから二人で暮らし始めて、結婚して、花が生まれたの。結果的には駆け落ちって形になっちゃったけど、どちらかが押し付けたことじゃない。二人で決めたことよ』

「そっか……じゃあ、ママたちはちゃんとお互い好きで一緒になったんだ」
　ぎゅっと握りしめた電話の向こうで咲が『そうよ』と言った。
『でも塚本の家の人たちのように誤解している人はたくさんいる。だから今まで圭祐が亡くなった時以外は連絡もしなかったし、会うこともなかった。助けてもらうつもりもなかったし。でも公後悔はしていないわ。間違ったことをしたとも思わない。だって私たちはお互い確かに幸せだったもの。足りないものはたくさんあったけど、その確かな事実があったから生きてこれた』
　凛とした咲の声。花が大好きな咲の声だ。どんな困難にあってもけしてくじけず、前を向いて立ち向かう。小さい頃からずっと憧れていた。いつか咲のようになりたいと。何事にも全力でぶつかって、みんなを助け、笑顔にする。こんなに気高く美しい人を花は他に知らない。
「でも……どうして私に優華を勧めたの？」
　一切連絡をしなかったということは、これからも会うつもりはなかったということだろう。それなのに、どうして咲は花をN市に行かせたかったのか。
『……花に見てほしかったの。あたしたちの思い出の場所を』
　ふっと笑ったような息遣いが聞こえた。
『辛いことも多かったけど、大事な場所だから。花にもいい影響になればと思って。塚本の人たちのことは気がかりではあったけど、まさか花が接触することになるとは思っていなかったから。百合子さんにも頼んであったしね。本当にそれだけだったのよ。まさか勇祐さんの娘と花がそっくりだったなんて。娘がいるとは知っていたけど……迂闊だった

わ』
本当にごめんね、と咲が繰り返す。その言葉は小さなナイフの先みたいに花の胸を突く。
『せめてもっと早く気付いてあげられればよかった。花は優しくて我慢強いこと知ってたのに。だめね、母親なのに。てっきり楽しくやってるだろうって疑わなかった』
「違うのママ」花は慌てて否定した。
「今はお友達も出来て本当に楽しくなったの。それに……助けてくれた人はちゃんといたから」
星流がいたから。逃げ出さずに済んだ。咲にとっての父のように。ただ一人、花を信じてくれた人が。
『ねえ花、あたしそっちへ行こうか』
「え？」
『塚本の人たちに会って説明するわ。全部誤解だって。……いつかはちゃんと向き合わなきゃいけないとは思ってたの。だから』
「ママ」
来てほしい——もちろん。咲と一緒ならどんなに心強いだろう。——でも花は迷った末に切り出した。
「来てくれるのはうれしい。でも……それはママ自身が納得したらにして。私のために無理するんじゃなくて、ママ自身のためにそう思うなら来て。それでいいから」
それが、きっと一番いい。
これは咲と花、二人の問題であるのだから。

少しの沈黙ののち、咲が小さく『わかった』と言った。いつもよりすがすがしい気持ちで花は電話を切った。

――やばい、チャイム鳴っちゃった……！

翌朝、花は朝のホームルーム開始の合図と同時で校舎に飛び込んだ。

寝坊なんて今まで一度もしたことがなかったのに。咲にすべて話して気が抜けたせいだろうか。それになんだかだるい。風邪でもひいたのだろうか。

怒られるのを覚悟で教室の後部ドアをそろりと開ける。でもまだ担任の美奈子は来ていなくて、教室内はざわついていた。

――どうしたんだろう。

なんだかいつもの騒がしさとは違う気がする。そう思いながら席に着こうとすると、何人かのクラスメイトたちが花のそばにやってきた。

「あ、あの、西野さん。ごめんね、その……疑って嫌な態度とって」

「え？」

なんのことかわからずにぽかんとしていると、亜樹と絵里がやってきた。

「前の盗難事件のことだよ。なんか、真犯人が名乗り出たんだって」

「それ今朝職員室に行った子が聞いたんだって。職員会議でＨＲなしらしいよ」

――えっ……。

真犯人？　驚いて花は回りを見た。他のクラスメイトたちも申し訳なさそうな表情で花をちらちらと見ている。

真犯人？　本当に？　一体だれが――だが、花が聞いたのは意外な名前だった。
「つ、塚本さん！」
校長室から出てきたありさへ花は駆け寄った。
必死で走って来たせいか息が苦しい。鼓動もはやくなっている。でもいてもたってもいられなかった。
「あの……先生に話したって」
「そうよ。だったらどうだっていうの？」
そっけなく答え、ありさはくるりと背を向けて歩き出した。
「ま、待って」
とっさに花も後を追った。でもそうしたはいいが、何と声をかけていいかわからない。触れて引き止めることも呼び止めることも出来ず、不審者のように一定の距離を保ったまま後をくっついていく。
――ど、どうしよう。
こんな時気のきいた一言がすぐに出てくればいいのに。気持ちばかり前に出て何も見つからない――そうおどおどしていると、渡り廊下に差し掛かったところでありさがぴたりと足を止めた。
「何よ、なんでついてくるの？　言いたいことがあるならハッキリ言いなさいよ！」
振り向きざまに怒鳴られて、花は思わず肩をすくめた。いつもならここで「ごめんなさい！」と謝って下を向いてしまうところだろう。でも逃げちゃいけないと自分を奮い立た

せてありさを見つめ――花ははっとした。
「あの……大丈夫？」
　そう訊いてしまったのは、ありさの表情が想像していたものと違っていたからだ。唇を噛みしめこらえているけれど、その顔はほとんど泣き顔に近かった。
「……なによ、それ」それでも精一杯花をにらみつけ、ありさは悪態をつく。
「バカじゃないの？　それしか言うことないの？　もっと文句とかあるでしょ？　あんたのせいでひどい目にあったとか、人に罪なすりつけてサイテーとか、言えばいいじゃない！あたしのせいでいじめられたのよ。なんで怒らないの？　どこまでお人好しなのよ！」
　人気のない渡り廊下にありさの悲痛な声が響いた。
　そうだ――確かにその通りだ。ありさは花に泥棒の罪を着せた。悪い噂も流した。たくさん傷つけられて、すごく悲しかった。普通なら怒って、罵って当然だ。でも不思議なことに、今の花の中にはそういう黒く激しい感情は一つもなかった。
「私、そんなこと思ってないよ。私……怒ってなんかいないもの」
「……怒ってない？」
　ありさの潤んだ瞳が揺れた。
「うん、だって……塚本さん、正直に話してくれたじゃない。勇気を出して頑張って言ってくれたんでしょ。私は……それがうれしいんだ。それに……嫌なことばっかりじゃなかったから」
　そう言って花は小さく笑った。
　辛いことはたくさんあった。でもそのおかげで、今まで知らなかった自分に出会えた。

友達も出来た。たぶん、事件がなかったら自分はもとの冴えない臆病な花のままだったと思う。だからいいこともたくさんあった――なんて考えるのは能天気すぎるだろうか。

「……ばっかじゃないの」両手でぐいと目頭をぬぐい、ありさは花に背を向けた。

「別にあんたのために言ったんじゃないわよ。あんたを助けるためじゃない。ただ、すっきりしたかったの――自分のために。だから認めて罰も受ける。それだけよ。だから勘違いしないでよね」

――でも。

言い終えると、ありさはぱっと走り出した。長い黒髪がふわりとなびいた。

遠ざかっていく後ろ姿をぽつんと眺めながら、花はじんわりと熱くなる胸をそっと押さえた。

――それって……私のためだよね？

私の声が届いたんだよね――？

泣いていたありさの手がそっと花の手に触れたあの時、

少しだけ、心が繋がったような気がした。そう感じたのはきっと間違いじゃない――

――いつか友達になれるかな……。

ちゃんと向き合ってわかりあえる関係に。そう信じたいと花は強く思った。

翌日も学校では朝からありさの話題で持ちきりだった。

昨日まで自分の陰口を言っていた人たちが皆、ありさの話をしている。なんだかとても皮肉なことのように思えた。

今は誰も花を冷たい目で見たり笑ったりしない。誤解が解けたことはうれしかったけれど、気持ちは完全には晴れなかった。今度はありさが同じ目にあうのだ、と思うと。
「西野さん、おはよう」
「おはよー」
教室のドアを開けた途端クラスメイトたちの挨拶が次々に飛んできた。一昨日まではありえなかったことだ。おはよう、と笑顔で返しつつも花は内心複雑な心境だった。
カバンを机の上に置いたところへいつものように絵里と亜樹がやってきた。
「おはよー、花。ねえ聞いた？　塚本さんのこと」
「塚本さん、三日間の停学だって」
「えっ」
声を上げた瞬間、くらりと目まいがした。昨夜念のため市販の風邪薬を飲んだけれど、まだだるくてぼーっとするせいだ。やっぱり本格的に風邪をひいたのかもしれない。倒れてはまずいと思い花は席に座って話を聞くことにした。
「塚本さんのクラスの子に聞いたんだ。昨日先生たち会議してたでしょ、それで決まったみたい。まあ、しょうがないよね～。だって人の物盗んでそれを全部花のせいにしたんだもん。反省すべきよ！　ていうかさ、花の気持ち考えたらちょっと軽すぎない？」
不満そうに絵里が唇を曲げた。自分のことのように怒ってくれるのはうれしかったが、昨日のありさの表情を思い出して花は少し心配になった。
――停学……三日間。
仕方のない罰なのかもしれない。だけど自分のことのように気分が重い。

「うん、実はわたしも不思議だったんだ。ほらうちの学校ってお嬢様校だから評判とか気にするじゃない？　もしかして退学になっちゃうんじゃないかなあと思ってたんだけど」
「え〜〜！　じゃあもしかして、地主の娘だから処分が軽く済んだとか？　それってずるくない！？」
絵里に食いつかれ、「いや、噂なんだけどさ」と亜樹が言葉を挟む。
「……もしかしたら星流様のお父さんが絡んでるんじゃないかって」
「どういうこと？」
聞き返した絵里と同じ気持ちで花も亜樹を見た。
「星流様のお父さんって政治家でしょ？　優華の理事たちとも繋がりがあってコネがきくらしいんだよね」
「ええ〜それじゃ、わざわざ星流様がそう根回ししたってこと？　やっぱあの二人付き合ってるわけ？」
「そ、それは違うと思う！」
思わず花は会話に割り込んだ。絵里と亜樹が驚いた顔でこちらを見た。
「違うってどういうこと？　花、何か知ってるの？」
「え……えっと、その、そんな気がするだけなんだけど」
——しまった〜、私のバカ〜！
あはは、と笑って誤魔化す。怪しまれるかとヒヤヒヤしたが、絵里と亜樹はさほど気にならなかったらしく「なーんだ」と言って話を続けた。
「付き合ってるかどうかはわからないけど、もう一つ噂があってね。今高速道路建設の件

でもめてるじゃない？　建設予定地の周辺って大部分が地主の土地だけど、塚本本家は反対してる。でも事業の着工には本家の同意が絶対だから、星流様はそのために塚本さんに近付いたんじゃないかって」

――え……？

ほっとしたのもつかの間、花の心臓がいつもと違う音を立てた。

「星流様のお父さんって交通省の偉い人なんだっけ？　確かＮ市の出身なんだよね。それってありえるかも。お父さんに命令されたとか」

「それで退学処分のところを停学にして、塚本家を賛成派に取り込もうとしてるとか……まああくまで噂だけど。退学処分じゃさすがに重すぎるしね……あっチャイム鳴った！」

ホームルーム開始の音に話は中断になった。じゃあね、と絵里と亜樹が席に戻っていく。頷き軽く手を振りながら、花は指先が冷たくなっていくのを感じた。

――まさか……まさかね。

星流が利用するためにありさに近付いたなんて。そんなことするはずない。そう言い聞かせる。

でも、星流は事情があってありさと一緒にいたと言っていた。それから親同士が接点があるということも――

――そんなことない、でも……だったら、あれはどういう意味だったの？

『もし、自分の夢が叶うチャンスがきて、でもそれと引き換えに、したくないことをしなければならなかったり、誰かを傷つけるとしたら……どうする？』

信じたい気持ちの中で、少しずつ不信感が大きくなっていく。

教室内の雑音のせいなのか、騒ぐ気持ちのせいなのか、ズキズキと痛む頭を抱え花は目を閉じた。

結局頭痛とだるさがひかず、花は昼すぎに早退した。

半分も食べられなかったお弁当とカバンを手にとぼとぼと歩いて帰って来ると、有川家の門の前に佇んでいる女性の姿が見えた。

すらりとした上背に、白いスーツ。足元には小さなスーツケースがある。

——あれ……？　あれって——

「ママ……！？」

その声に女性が振り向き、サングラスを外した。

「花！　やだ、会いたかったわ～！」

大輪のひまわりのような笑顔を輝かせ、咲が両手を広げて駆け寄ってきた。驚きで一瞬ぽかんとしたが、花も腕いっぱいに母を受けとめた。

「ほんとにママ！？　どうしてここにいるの？」

「花に会いたくて来ちゃったの。あ、お店はマネージャーに任せてきたから大丈夫よ。花こそどうしたの？　今学校じゃ……あらっ！？　コンタクトにしたのね！」

両手で花の顔を包み込み咲がまじまじと覗き込んでくる。

「やだ、かわいいじゃなーい！　……て、あなた顔色悪いんじゃない？　どうかした？」

「うん、なんか風邪みたいで……早退して来たの」

「そうなの？　大丈夫？　もしかして熱があるんじゃない？」

咲の手が今度は額に伸びる。優しいぬくもりがふわりとふれると、急に息が楽になった。
「うーん、熱は今のところないみたいだけど……どんな感じ？　辛いの？」
不思議。だるさも重たい気持ちも溶かされていくみたい。咲の手には魔法の力があるのかもしれない。久しぶりに安らいだ気持ちで花は首を横に振った。
「少し頭が痛くてだるいだけだよ。大丈夫」
「そう？　念のため病院に行った方がいいんじゃない？」
「少し休めば平気だよ。夏バテかもしれないし。それより、急に来るなんてびっくりしたよ。何で連絡くれなかったの？」
「ああ、うん――しようと思ったんだけどね」少し視線を泳がせた後、咲は微笑んだ。
「……やっぱりこのままじゃいけないと思って。話をしに来たの」
「……はなし？」
「そう。塚本の人たちとね」

「……それで」
無感情、という言葉がぴったりな抑揚のない声で、花夜が向かいに正座をする咲に問いかけた。
「いったいどういう風の吹き回し？　あなたからやってくるなんて」
塚本家の本家。
以前も花が通された座敷には、当主の妻である花夜をはじめ、ありさ以外の塚本家の面々が居並び、厳しい眼差しをこちらに向けている。そんな針の筵の上で、咲はぴんと背筋を

伸ばし堂々と花夜と向き合っていた。
「ご無沙汰しています。圭祐さんが亡くなって以来ですね。お元気そうでよかったです」
室内に沈黙が降りる。咲の隣に座る花の両肩にも、その空気は重くのしかかってきた。
「……そんなことを言いに来たわけではないでしょう。用件は何？　お金の工面なら――」
「そんなことを頼みに来たんじゃありませんわ。ご心配いただかなくても、金銭面では困っておりません。経営している飲食店がことのほか経営が順調ですから」
にっこりと花夜の言葉を遮り、咲は続けた。
「今日伺ったのは、きっちりと話をしておかなければならないと思ったからです」
「話って一体何よ。私たちがその子に辛く当たったから、慰謝料でもふんだくろうっての」
刺々しい口調で呟いたのは花夜の後ろに座る多恵だ。それを目ざとく見つけ、咲は目線を送る先を変えた。
「……皆さんに責められたことは聞いています。でもそのことを糾弾するつもりはありません。私も花も、過ぎてしまったことを掘り返してネチネチ言うのは嫌いですから」
さりげない嫌味に、多恵がぐっと息をのんだのがわかった。四面楚歌ともいえるこの状況の中でもまったく物怖じしない母の強さを、花は改めてすごいと思った。
「私がここへ来たのは誤解を解くためです」
「……誤解？」
落ち着き払った姿勢は崩さぬまま、花夜がかすかに眉を寄せた。
「皆さんが私のことを快く思っていないのは承知しています。関わりたくないと思っていることも。でも花が優華に入学したことは昔の因果とは何も関係のないことです」

きっぱりと言い放った咲を、花はそっと見上げた。
「花に優華女学院への進学を勧めたのは私です。でもそれは、塚本家の皆さんへの当てつけでも、財産を請求するためでもありません。ただ、多感な時期を少しでもいい環境で過ごして欲しくて。理由はただそれだけです。だからどうか花を責めないで下さい。この子は何も知らなかったんです」
「そんなの信じられないわ」声を上げたのはありさの母のなつみだった。
「だったら何で私たちの生活が掻き乱されなきゃならないの！　本当は仕返しのためなんでしょう！？　ありさのことだって、この子が現れなきゃ――」
「なつみさん、落ち着きなさい」感情を爆発させるなつみを花夜がたしなめる。
「……ありさのことは、気付いてやれなかった私たちの方にも非があるわ。それに、この子に対して少し言い過ぎてしまったことも事実。そのことについては謝ります。ありさのことで迷惑をかけたことも。けれど、彼女の存在を知れば私たちが過剰に反応を示すだろうということをあなたはわかっていたはず。たとえ本当に彼女が何も知らなかったとしても、質の悪い嫌がらせだと思われても仕方がないことでしょう」
――そんな――ママはそんな人じゃない……！
そう言おうと伏せていた顔を上げると、大丈夫よというように咲が花の肩に触れた。
「ええ、そう思われても仕方がないことだと思います。すべては花に何も話していなかった私の責任です。混乱させてしまい、申し訳ありませんでした」
全員に向かって咲が頭を下げた。
ママのせいじゃない――そう言いたいのを花は両手を握りしめ、唇をぐっと結んでこら

えた。
何もできないのが情けない。自分が無力な子供でしかないんだということが。咲を守るんだと決めたのに、結局こうして守られている。
「……でも」しばらく頭を低くした後、咲はすっと姿勢を正した。
「さっき言ったことは本当です。花に見てほしかったんです。ここがお父さんが生まれた場所だって。この子は圭祐さんのことを何も覚えていません。何の思い出もありません。だからせめて――そのかわりにと」
それを聞いて、引き結んでいた唇がふっと緩んだ。
「私のことは許してもらえなくて構いません。憎んでもかまいません。二度と顔を見せるなというならそうします。でもどうか花のことは否定しないで下さい。この子はたった一つ、残された圭祐さんの形見なんです。彼が生きていたという証なんです。それは皆さんにとっても同じはず。だからお願いです。この子を、卒業までの間、父親が生まれ育ったこの場所にいさせてやってください。少しでもここに残る思い出と一緒に置いてやってください」
――ママ……。
お願いします、と再び頭を下げた咲を花はただただ見つめた。
――そんなことを思ってたの……？
この街は父の形見。だから咲は花にこのN市へ来てほしかったのだ。父が歩いたかもしれない道や、学校や、空や海を見せるために――。涙がせりあがってくる衝動を花は再び唇を閉じて必死に飲み込んだ。

「……それに、私は後悔はしていません。圭祐さんの手を取ったこと。たとえ一生わかってもらえないとしても——短い間でも私たちは一緒にいられて本当に幸せでした」
再び広い座敷に沈黙が流れた。どういうわけか誰一人反論はしてこなかった。しばらく静寂に身をゆだねた後、咲は花の方を見てふっと微笑んだ。
「帰ろう、花」
そう促され、花は膝の上でかたく握りしめていた両手の強張りを解いた。
一礼をして咲が立ち上がる。花も真似をして座敷を出て行く咲を追った。廊下に出て玄関へと向かう。だがその途中ばったりありさと出くわした。
「あら」姿を見た途端、咲が驚きの声を発した。
「あなたがありささんね。本当に花とそっくり。初めまして、花の母です」
「……どうも」小さくお辞儀をして、ありさはそのまま気まずそうに俯いた。怒られると思ったのだろう。でも咲は余計なことは何も言わず、明るく笑いかけた。
「複雑な気持ちもあると思うけど、花をよろしくね。この子あなたと友達になりたいのよ」
「マ、ママ」
何を言い出すの、と慌ててスーツの袖を引っ張る。おそるおそる顔を上げたありさは上目遣いに咲を見つめ、そして花の方を向いた。
「あの……ちょっと話してもいいですか」
「ええ、いいわよ。じゃあ花、あたしは先に外に出てるわね」
二人きりで廊下に残され、花は何て声をかけようか迷った。謹慎はどう？　なんて無神経すぎるし、元気？　なんて聞くほどの仲でもない。咲があんなことを言うから気まずい

のもあって内心だらだらと汗をかいていると、
「……あたしのことを言いに来たの？」
「ち、違うよ」花はぶんぶんと首を横に振った。
「皆の誤解を解きに……ママが来てくれたの。わかってもらえたかはわからないけど、私もママも……前に進みたいから」
「……そう」座敷の方へありさが顔を向ける。元気のないその様子に、やっぱり辛いのかなと思っていると、急にこちらに向き直った。
「……別に気にしなくていいから」
「え？」
「あたしのこと、大丈夫だから。……いろいろ悪かったわ」
——今のは聞き間違いだろうか。まさか謝られるとは思っていなくて花は面食らった。
「あんたの顔見てればわかるわよ。気にしてることくらい。悪いのは全部あたしなんだから……あんたは堂々としてればいいのよ。それに自分のせいみたいな顔されると、すごいみじめな気分になる。だからやめて」
フンと鼻を鳴らしありさがそっぽを向く。正直、態度は謝罪のそれにはほど遠いものだったが、それが今のありさの精一杯なのだと花はわかった。ツンツンしている口調も、今までのように花を突き刺し傷つける響きを持ってはいなかった。
「うん、わかった。……また学校で会おうね」
うれしさがじんわりと胸一杯に広がっていく。咲を待たせているのを思い出し、花は「じゃあ」と立ち去ろうとしたが、「ねえ」と呼びとめられ振り向いた。

「あんた、星流先輩と仲良くしてるみたいだけど……勘違いしない方がいいわよ」
「え……？」
「たぶんあたしと同じで利用しようと思っただけだと思うから」
――利用？
唐突な忠告に戸惑う。視線を揺らしているとありさは花の横を通り過ぎ、背中越しに言った。
「聞いてみるといいわ、星流先輩に。でも早くした方がいいかも。もうすぐいなくなっちゃうから」
「え？　あの、それって――」
どういう意味、と聞こうとして振り返ったが、すでにありさは家の奥へ行ってしまった。
――今のって……なに？
勘違いって？　それにいなくなるとはどういうことだろう。
不安が一気に押し寄せる。
けれど確かめるすべはなく、花はそのまま塚本家を後にした。

「花の名前はね、おばあちゃんからとったのよ」
アパートへ帰るタクシーの中、咲が懐かしそうに過ぎて景色を眺めながら言った。
「おばあちゃんの名前は〝かよ〟。花の夜と書くの。パパがね、そうしようって言ったの。きっと喜ぶからって。いつかわかってもらえる日がくるって……そう思ってたのね。結局生きてる内には叶わなかったけど」

車窓の外の風景はほんのり茜色に染まり始めていた。穏やかなその光が窓辺に寄りかかる咲の寂しげな微笑みをかすめていく。
「わかって……くれるよ、きっと」
母が泣いてしまうのではないかと思って、花はとっさに励ましの言葉を選んだ。けれど心のどこかでそうは思っていない自分もいた。
あの人たちにはわかってもらえないかもしれない。咲の気持ちは届かないかもしれない。
真実を伝えることで人はわかり合うことが出来る。でも、うまくいかないこともある。どんな言葉を持ってしても、解決できない問題もある。
パズルのピースみたいに、探せば必ず合うものがあればいい。けれど現実の出来事はそうではないのだ。
父の思いのために、花の未来のために、咲は頭を下げた。さっきのことが脳裏に焼き付いて離れない。
塚本家の人たちは何を思っただろう。咲のことを少しは認めてくれるだろうか。それとも今までのように聞く耳を持ってはくれないだろうか。
でもどちらの結果になっても――花には揺るがない思いがあった。
「ねえ、ママ」
「ん？」と咲が首を傾けた。
「私ね、パパとママの子に生まれてきてよかったと思ってる。たとえ誰にどんなこと言われても、認めてくれない人やわかってくれない人がいたとしても、ずっと変わらないから。

だから大丈夫だよ、何を言われても」
母が父と出会って幸せだったと言ったように。
真実はちゃんとここにある。それがわかっていれば、何があってもきっと平気だ。
「……ありがと、花」
咲がそっと花の手を握った。その手を花も握り返した。
アパートの前でタクシーを降りた頃、空は薄紅色から鮮やかな赤へと変化を始めていた。
「ねえママ、今日はこっちに泊っていくの？」
「うん、そうするつもりよ。お店には二日休みをもらってあるから。ねえ花、そういえば具合は大丈夫？　結局休まずに付き合わせちゃったけど……今から病院行く？」
まだ間に合うわよ、という咲に花はううんと首を振った。
「もう大丈夫。ていうかすっかり忘れてた」
思い出した途端少し体が重くなったような気がしたけど、気のせいだと思うことにした。せっかくこうして咲が来てくれたのだから、たくさん話がしたい。
「無理しちゃだめよ？　いいわね。よーし、今日はママが久しぶりに腕をふるって栄養のあるものいっぱい作ってあげる。あ、でもその前に百合子さんに挨拶しなきゃ――あれ？」
二人で並んでアパートの方へ向かっていると、前方から誰かが歩いてくるのが見えた。十夢かな？　と思いながら近付くにつれ――その輪郭がはっきりしてきた。
「えっ……星流くん！？」
目の前に現れたのは制服姿の星流だった。自転車を押している。学校の帰りなのだろう。

「ちょっと花、誰！？　イケメンじゃない！」
咲にぐいっと腕を引き寄せられる。まさかの展開に花の思考回路はこんがらがりそうだった。
「え、えっと、あの、どうしたの！？　こんなとこで……」
「うん、実はちょっと話があって。電話したけど留守電だったから。ごめん、お客さん来てたんだ」
自転車を止め、星流が咲に向かってぺこりと頭を下げる。花は慌てて説明した。
「えーと、あの、お客さんていうかお母さんなの！　東京から会いに来てくれたんだ」
「ああ、そうなんだ。こんにちは、初めまして。十河といいます」
再び礼儀正しく星流が一礼する。咲のテンションが上がっていくのが花には手に取るようにわかった。
「あら～ご丁寧に！　初めまして～花の母ですぅ。ちょっとやるじゃない花！　もしかしてカレシ！？　しかもその制服、昇星よね。てことは玉の輿」
「ちょ、ちょっとママ！　違うから！　星流くんは彼氏なんかじゃないよ。ただ私が困っていた時に助けてくれて……すごくお世話になってる人なの！」
「あ、そうなの？　ごめーん、花に男の子の友達なんて初めてだからつい……。ごめんなさいね、騒がしくて。いつもありがとう、花がお世話になって。あ、この子に会いに来てくれたのよね？　立ち話じゃなんだから上がってもらったら？　あたしは消えるから♪」
さあどうぞ、と咲が勝手に星流を促す。しかもすごく楽しそうな顔をして。何を言ってるのよ～！　母の暴走に花が口をぱくぱくさせていると、

「あ、いえ……ここで大丈夫です。すぐに帰りますから、お気遣いなく」
　星流がやんわりと断ってくれたので、花は心底ほっとした。
「あら、そう？　じゃああたしは百合子さんのところに行ってくるから、ゆっくりどうぞ」
　じゃあねと手を振りながら、うれしそうに咲は有川家に行ってしまった。嵐が過ぎ去った後のような心地で、花は深いため息をついた。
「ご、ごめんね、あんな母で……。気にしないでね」
「大丈夫だよ。きれいなお母さんだね。それに元気」
「あはは、びっくりしたでしょ。似てなくて」
「え、そう？」星流が首を傾げた。
「似てると思うけど。笑ったところなんか」
　――似てる？　お世辞でも言われたことがないのに……。もしかして星流は相当目が悪いのだろうか。そう真剣に考えながらまじまじと見つめていると、「どうしたの？」と聞かれ花は我に返った。
「ううん、ごめん何でもない。そういえばどうしてここがわかったの？　私話したっけ？」
「いや、途中で有川くんに会ったんだ。それでここで下宿してるって聞いて……迷惑かなと思ったんだけど、早めに話しておきたくて待ってた」
　話、という言葉に嫌な予感がした。絵里たちのいったこと、ありさの言ったことが胸を過ったが、とりあえず「話って何？」と笑顔で返した。
「前に航海士になりたいって話したの覚えてる？」
「うん、覚えてるよ」

「親父に正直に話したんだ。自分のやりたいこと。もちろんうちは代々役人の家系だから反対されたけど……でも許してもらえそうなんだ」

「えっ、ほんと？　よかったね！　じゃあ免許とってもいいんだね」

最初の夢が叶うんだ——そう喜んでいると、星流の顔色がふいに曇った。

「うん、でも……条件つきなんだ」少しの間があいた。やがて星流は真剣な表情で告げた。

「二年間の留学。来月から、イギリスに行くことになった」

生温かい夕風が吹いた。さっきまで明るかった空が夜に向かってじょじょに翳り始める。それに合わせ、地面に映る黒い影もゆっくりと短くなっていく。

「……留学？　二年も？　来月って……すぐじゃない。……何で？」

そんなの——嫌だ。

聞き間違いではないかという可能性を花は必死に探した。真実であって欲しくなかった。

「好きな道へ進みたいなら、まず実力を示せって。兄貴も親父も行ったイギリスの学校へ留学していい成績をおさめること、それが条件なんだ。急だし迷ったけど、自分のためにも行くことにした。……だから準備に入る前に花ちゃんには話しておきたくて」

「……どうして？」

無意識に疑問の声が飛び出した。

「どうして、私に話さなきゃって思ったの……？」

あまりに唐突で混乱がおさまらない。星流がいなくなる——思いもよらない告白に今にもその場に崩れ落ちそうだった。

「花ちゃんなら、オレの本当の気持ちわかってくれると思ったから。自分のことみたいにうれしそうに話を聞いてくれたから。そのおかげで親父ともう一度話そうって思ったんだ」

その時、心の片隅に引っかかっていたあることを花は急に聞いてみたくなった。

「……星流くん、この前言ってたよね。夢を叶えるのと引き換えに誰かを傷つけることになったらどうするって。あれってどういう意味なの……？」

星流はどうやって父親を説得したのだろう。きっと簡単ではなかったはずだ。何かと引き換えに譲歩してもらったとしたら？　それはもしかして――

「……うちの親父が政治家なのは知ってるよね」ズボンのポケットに両手を入れて、星流は夕空を見上げた。

「N市の市議会議員だった時期もあるんだけど、その後国会議員選挙に出馬して……まあ運よく出世して。ここは地元だから色々とよしみがあるんだ。知り合いも多いし、世話になった人たちも大勢いる。それで頼みごとをされることもあって……。でも不正とかじゃない。賄賂をもらってるわけでもない。ただ、ちょっと調べてほしいとか、様子を探ってほしいとか小さなことが多いんだけど」

「……それって、高速道路のことと関係ある？」

星流がはっとした顔でこちらを見た。しばらく二人の間に沈黙が流れた。――それが花の知りたかった答えだった。

「……ほんとなの？　塚本さんに……ありささんに近付いたのは、お父さんの命令だって」

否定して。

　捨てきれない期待と消し去れない不安の間で花はそうつよく願った。やがて星流は重い口を開いた。
「うん……それが最初の条件だった」
　目の前が一瞬真っ暗になった気がした。震える両手に花は力を込めた。
「でも途中で罪悪感に耐えられなくて、親父に抗議した。これ以上はもう嫌だって。それで留学っていう別の条件が出されたんだ」
「ありささんと仲良くしてたのは……利用するためだったの？」
「……否定はしないよ。そんなことしたくはなかったけど、近付いた理由は父に言われたからだったから。彼女には話して謝った。このままじゃ後悔すると思ったし、彼女を傷つけたくもなかったから」
——塚本さんは聞いたんだ。
　だから花に忠告したのだ。でも……どうして？　どうして自分に星流の裏切りをほのめかす必要があったのだろう——
「……じゃあ、私は？」
　もしかして、それは。一つの可能性に花は行き当たった。
「私に近付いたのも、利用するためだった……？　私も、塚本家の血縁だから？」
　心臓の音がドクドクと嫌な音を立てている。胸が苦しい。喉に何か詰まっているみたいに息もうまく出来ない。
「もしかしたら役に立つかもしれないって思ったの？　だから優しくしてくれたの？　歓迎会で助けてくれたのも……励ましてくれたのも……全部嘘だった？」

自分の口が紡ぐ言葉が、まるで尖ったナイフみたいに思えた。
こんなこと聞きたくないのに。いつもみたいに俯いて黙っていればいいのに、今日はそれが出来ない。星流から目がそらせない。誰かに押さえつけられているみたいに動けない。
「……ごめん」
返ってきたのはもっとも残酷な一言だった。
「……ほんとにそうだったの？」
俯いたまま星流は答えない。じわりと目の縁に熱いものが浮き上がった。
そういえば星流はありさと自分のことを何も聞いてこなかった。周りが色々騒いでいたし疑問に思わなかったけれど、最初から知っていたのではないのか。
「……そっかぁ……そうだよね。なんで星流くんみたいな人が私なんか相手にするんだろうって、ずっと思ってたんだ……。そうだよね、理由があるに決まってるよね」
痛い——何でこんなに胸が痛いんだろう。死んじゃいそう。悲しくて、悲しくてどうしていいかわからず花は無理やり笑った。
「……あは、でもだめだったでしょ。私塚本家に嫌われてるもん。利用価値ゼロだよね」
両目から涙がぼろっとこぼれ落ちた瞬間、もう何も見えなくなった。泣いたらだめだ、もっと辛くなる——でも止まらなくて口元を押さえた時、星流の声がした。
「違うんだ。あの日花ちゃんを助けたのはそのためじゃない。話を聞いたのも、励ましたのも、一生懸命立ち向かおうとしてる花ちゃんを見て本当に応援したかったからなんだ。確かに初めは……何か聞きだせるかもって思ったこともある。でもいつの間にかそんなの忘れてたんだ。泣いたり笑ったりしてる花ちゃんを見るうちに、どうでもよくなった」

──嘘だ、聞きたくない。

もうこれ以上無駄な期待を抱かないように、花は両手で耳を塞いだ。

「塚本さんに近付いたのは、親父のためだった。でも──花ちゃんは違う。助けたのも、一緒にいたのもオレ自身がそうしたかったからだ。嘘なんか一つもないし、利用するためなんかじゃない。……信じられないかもしれないけど」

花の返事を待つように星流が言葉を切った。

俯いたまま花は何も言わなかった。そんな気持ちになれるわけもなかった。しばらくした後、星流は自転車のスタンドを外した。

「オレさ。あの秘密の場所を教えたのも、夢の話をしたのも花ちゃんだけなんだ。きっとこれからも……花ちゃんだけだと思うから」

そう言い残し、自転車を押したまま星流は花の横を通り抜けた。

「──……っ」

振り返り、呼びとめようと花は口を開きかけた。

星流が遠ざかっていく。もう、二度と会えないかもしれない──

でもこれ以上傷つくのは耐えられそうになかった。気付いた時にはその場から花は走り出していた。

アパートを通り超えて有川家の方へ逃げるように走る。

走るのは大の苦手だ。転びそうになる。けれどすべての力を振り絞って足を動かした。

庭を抜けると、玄関先でマメ柴のロクが驚いたのかワンワンと激しく鳴いた。それに構うことなく、花は玄関の中に飛び込んだ。

「あら、花じゃない。今ちょうど戻ろうと思ってたところだったのよ。彼はもう帰ったの？　百合子さんがよかったらごはん一緒にって誘ってくれてるんだけど」

そこへちょうど居間にいた咲が顔を出した。ぱたぱたと小走りにやってくる足音に花は顔を上げた。その途端、咲がぎょっとした顔をした。

「花……どうしたの！？　泣いてるの？　ていうか顔が真っ青じゃない！」

一緒に出てきた百合子もびっくりした顔をしている。

慌てて玄関に降りてきた咲の胸に、倒れ込むようにして花は抱きついた。

「ちょっと、花！？」

息が苦しい。頭がガンガンする。もう何が何だかわからない。

今までの、星流との思い出がガラスのように砕けて消え去っていく。しがみつく指先がどんどん冷たくなっていくのを感じた。

耳元で咲や百合子の心配そうな声が飛び交っている。それが少しずつ遠のき――花の意識は暗闇の中に沈んでいった。

From · N
番棚葵
Illustration: 伊藤由希

あらすじ

幼なじみの来夢から、Ｎ市の名物作成を持ちかけられる隆也。Ｎ市が嫌いなため気乗りしない隆也だったが、協力するうちに来夢への自分の気持ちに気づいてしまう。そして、自分のＮ市に対する気持ちも疑うのだった。

谷川来夢

地元をこよなく愛する少女。隆也の幼なじみ。元気はいいが、思慮は浅い。

新井隆也

地元に嫌気がさしている少年。進学校に通っている。意外と流されやすい。

第五話　注文のない喫茶店

「自分のやるべき事、か」
　隆也はつぶやくと、まっすぐにのばした手の甲を見つめた。
　彼は自室のベッドに寝転がり、天井に顔を向けている状態にある。ちょうどまぶしい電灯を遮るように、手をのばしていた。
　そのまま、ごろん、と横になる。
「俺は本当、どうしたいんだろうな。ここを出ていきたいのか、それとも」
　彼がつぶやいている疑問は、N市に対してのものであった。
　先日彼は、お隣さんにして幼なじみの少女、谷川来夢に対する認識を、はっきりと自覚するにいたった。その認識とはつまり、男性が女性に対して抱く感情の一種である。
　まだそのことを来夢に打ち明けていないのだが、まぁ、そのことはいい。それは時期を見ていずれ……というより、その前に決めておかなければならないことが彼にはあった。
　彼は幼い頃から、この不便な田舎町の生まれ故郷のことを嫌っていた。そのために進学校に入り、都会の大学に入るために勉強してきたのだ。

だが、その目的意識が漠然としたものだったことに、改めて気づかされたのだ。それは皮肉にも、来夢への想いが浮き彫りになった時に、同様に自覚することとなった。

自分はこの町を本当に出ていきたいのか？

出ていくとするなら、その後どのような人生を歩むべきなのか？

そして、その時来夢に対する想いはどうするのか？

色々な疑問符が彼の頭に浮かび、消えることがない。成績優秀な彼でも、この数々の難問を即座に解くことはできないのである。

それともう一つ。

「あれ、どうしようかな……」

今日学校で言われたことを思い出し、隆也は一人つぶやいた。

一時期学業の成績が落ちていた彼だが、生来の勤勉さが手伝ってそれを取り戻すことに成功し、その結果担任の教師にある提案をされたのである。

それは彼にとって魅力的な提案であり、同時に今抱えている疑問のヒントを彼に与えてくれるような気がした。ただの現実逃避かもしれないけど。

「でも、一年……」

たったの一年というべきか。一年も、というべきか。

彼は体を起こすと、ふと窓の方を見た。その向こうには、来夢がいるはずだった。

○

来夢の頼み事はいつも唐突である。
「隆くん、お願い。手伝って！」
とある休日。部屋にやってきて、両手を合わせるなりそんなことを言ってきた彼女を、隆也はきょとんとした目で見た。
「お断りだ」と、今までなら言っていただろう。だが、今回は違った。
「何を手伝うんだ」
「え？」
「どうせ、町興しとか名物探しとかだろう。早く話せよ」
「え、えええっ？」
驚きのあまりに、来夢が目を見開く。その理由は彼女自身の口から、絶叫となって出てきた。
「あ、あの、隆くんご本人だよねっ？　そこまでわかっていて、隆くんが素直に協力してくれるなんて奇跡みたい！」
「……今ちょっとだけ、素直に協力する気が失せたかな」
隆也は引きつった笑いを浮かべたが、今までが今までだったからしょうがないとも思い直した。
来夢は生まれ故郷のN市が大好きな人間である。この辺り、隆也とは対極的とも言える。そんな対極的な隆也に、「N市をもっと流行させたいから、名物を考えるのを手伝ってくれ」とお願いするのが、彼女の最近のブームなのだった。
当然、そのたびに隆也はそれを断り、それでも来夢の押しの強さに飲まれて渋々従って

いたのが「今まで」だったのだが。
　彼は心変わりの理由を話さず、代わりに肩をすくめてみせると、
「まぁ、たまにはサービスしてやってもいいかなって思ったんだよ。それより俺の気が変わらないうちに、早く話した方がいいぞ」
「あ、うん」
　隆也の自分に対する心情を知らないであろう来夢は、首を傾げながらうなずいた。
「あのね、私のクラスメートに喫茶店をやってる娘がいてね」
「喫茶店？」
「うん。喫茶店といっても、かなり昔からやっているらしくって。なんでも昭和初期の頃から経営している伝統ある店なんだよ」
「へぇ、結構な老舗なんだな」
　つぶやきながら、隆也は何となく今回の来夢の目的が見えてきたので、先回りすることにした。
「つまり、その店をN市の名物にしたいんだな」
「うん、そうなんだけど」
　歯切れが悪そうに、来夢がつぶやく。
「そう簡単に行きそうにないんだよ」
「どうしてだ？　そんな古くからある店なら、そこそこ注目は浴びることができるだろ。あとは宣伝次第だと思うが」
「うーん。それが……とりあえず、今からそのお店に行くつもりだから、隆くんも来てみ

てよ」
　立ち上がって複雑そうな顔をする来夢に、隆也もつられて顔をしかめた。
「ああ、なるほど」
　来夢の煮え切らない態度の理由は、一見してわかった。
　店の中には客がいない……どころの騒ぎではなかった。なんというか、店本来が持つ『活気』のようなものが消えている。店内は落ち着いたベージュの壁紙で覆われているのだが、それは下手をせずともセピア色にしか見えず、赤色のソファも、同色のカウンターチェアも、色あせて自分の役割が終わる時を待っているように見える。
　表に、場末の居酒屋よろしく無造作に置かれてあった『喫茶ハイランド』という看板も、埃をかぶって所々が破れていた気がする。
「なんというか、つぶれかけって感じだな……あ、ごめん」
　素直な感想を述べた隆也が、途中で慌てて謝ったのは、来夢に気を遣ったわけではない。その隣にいる自分達と同世代の少女を気遣ってのことだ。
　少女はそれなりに化粧やパーマなどでしゃれっ気を出していたが、この店には不似合いな存在にも見えた。彼女はため息を吐くと、
「いいよ。実際そうなんだし」
　肩をすくめてみせた。
　この少女こそが、来夢の同級生にしてこの店の店主の娘『山岸ひかり』とのことである。
　少女が身に纏っているのは一応シャツとタイトスカート、それにエプロンと喫茶店の

ウェイトレスの格好だ。が、仕事にやる気があるようにはあまり見えなかった。何しろ、ソファに腰掛けて、体をだらしなく崩しているくらいだ。客が来ないと割り切っているのだろう。

しかし、その娘を店主である父親がとがめる気配はない。それどころか、彼自身カウンターの向こうに椅子を引っ張り出してきて、腰掛けながら競馬新聞を読みふけっているありさまだ。ご丁寧にもラジオとイヤフォンまで用意してある。

「まったく。こんな店じゃ、いつつぶれてもおかしくないよね」

ひかりの言葉は自嘲的だと、隆也は思った。実際そうなのだろう。

「どうにかならないかな、隆くん」

ひかりの隣に腰掛けている来夢が、対面側の自分にそう言ってくる。つまり彼らは、ボックス席の一つに陣取って話をしているのである。隆也は腕を組むと、

「ここまで来ると難しいな」

正直な感想をもらした。

そもそも、来夢がこの店を知り得たのは、ひかりが自分の家の現状を彼女に報告してきたことにある。何かと交友関係の幅が広い来夢は、ひかりとも友人になっており、そのために愚痴を聞かされることになったのだ。

愚痴とはすなわち、「店が流行ってないの、どうにかならないかなぁ」とのことである。

しかし来夢は経営に関しては素人だ。そんな友人にわざわざ言うくらいなのだから、ひかりとしても半分以上諦めているのだろう。ただ言わずにはいられなかった、それだけの話である。

ちなみに、少し前ならもうちょっとこの店も繁盛していたらしいのだが。ある境をきっかけに、ぱったりと客足が遠のいたのだという。

「あれのせいなんだよねぇ」

ひかりが窓の外に目線を向けた。隆也と来夢も、それを追う。

ここは商店街の外れ、駅から少し歩いた所に位置しているのだが、さらに駅の近くに新築の建造物が建っているのがここからだと見える。ショッピングモールだった。

「あそこに出来たコーヒースタンドが、お客さん全部持って行ったんだよ。向こうの方がチェーン店で値段設定も安いし。店内も綺麗でお洒落だし。古いだけが取り柄の喫茶店じゃ、勝てるわけないよね」

大きくため息を吐いてから、ひかりは苦笑して隆也達の方を見た。

「だからさ。せっかく来てもらって何なんだけど、もういいんだ。谷川には思わず愚痴っちゃったけどさ。それでもどうにもならないって、わかってるし。これも時代の移り変わりって奴でしょ」

「そんな、ひかりちゃん……」

来夢が歯がゆそうにつぶやく。名物作りに着手できないのが残念なのもあるだろうが、それ以上に友人が心配なのだと隆也にはわかった。彼女が友人を何より大切にするのは、いつぞやの縁結びの神社の件で実証済みである。

しかしそんな来夢の心境を知ってか知らないでか、ひかりはわざとらしく明るい声を出した。

「あーあ、うちも何か新しい商売を考えないといけないよね。いつまでもこんな昔の店に

こだわってないでさ」
と、店主が持っていた新聞紙を、ぱさっ、と広げ直した。その仕草がなぜか隆也の目を引いた。妙に神経質な仕草。
ひかりはそれ以上何も言わず、来夢もかける言葉を探し始め、店内には微妙な沈黙が流れ始めた。
その時。
「何言ってるんだよ、姉ちゃん！」
若い声がした。いや、高校生である隆也が「若い」と評するのは若干おかしい気もするが、それだけエネルギーに満ちあふれている声だったのだ。
喫茶店のカウンターの横手、扉が開いて中から一人の男の子が顔を見せた。小学生の高学年といったところか。年相応の生意気さを湛えていて、しかし思春期の繊細さも湛えつつある、そんな顔をした少年だった。
「何よ、勇司」
うるさそうにひかりが言った。別に邪険にしているわけではなく、姉が弟をたしなめるような声だ。その言葉を、勇司と呼ばれた少年のキーキーと甲高い声が迎え撃った。
「この店がなくなって、いいわけないだろ！　姉ちゃんも、そんなの嫌だって言ってたじゃないか！」
「そりゃ嫌だけどね。これが現実なのよ」
「そんなの、俺は認めねぇ！　絶対にこの店は俺が建て直してやるんだ！」
「まだバイトもできない子供が、生意気言ってるんじゃないわよ」

呆れたように肩をすくめてみせるひかり。
勇司は言葉につまって顔を真っ赤にしたが、やがて「馬鹿野郎」と叫び店を出て行った。
カランカラン、とドアベルが鳴った後、ひかりが申し訳なさそうに隆也達を見る。
「ごめんね、あれうちの弟なの。この店のことが大好きでさ、私や父さんが店を諦めるって言うと、ああやって過激に反応するのよ」
「ああ、やっぱりひかりちゃんのお父さんもこの店は諦めてるんだ？」
「うん。まぁ、しょうがないと思うけどね。父さんも結構頑張ってたんだけど、やっぱり大手のコーヒースタンド相手じゃ疲れが見えてきて。今じゃあの通り」
来夢の言葉に、改めてひかりは店主の方を指さした。知らぬ顔で新聞を読みふけっている。ふと気になったように、来夢は質問を重ねた。
「そういえば、ひかりちゃんのお母さんは？」
「死んじゃった。私と勇司が小さい頃に」
「あ、ごめん」
「別にいいよ。慣れてるから……ただ、母さんが生きてたら、父さんももう少しやる気を出してくれていたのかな」
複雑そうにため息を吐くと、ふとひかりは目を瞬かせた。
「ねぇ、そういえば。あんたの連れは？」
「え。あれ？」
いつの間にか姿を消している隆也を認めて、来夢も同様に瞬きをした。

表に出てから勇司はふらふらと歩いていたが、やがて商店街の裏路地に入り込むと、側にあるゴミバケツに目を留めた。
「くそっ！」
叫んで蹴り飛ばす……仕草をする。実際に蹴ったりはしない、中が飛び散るのを恐れてであろう。この辺はまだ子供らしい。
彼は嘆息すると、納得いかないようにつぶやき始めた。
「まったく、姉ちゃんも父ちゃんも何考えてるんだよ。このままじゃ、本当に店がつぶれるかもしれないんだぞ。それなのに」
そして、再度大きく息を吐いたその時。
「そんなに、店を立て直したいのか？」
「え？」
後ろから声をかけられて、彼は思わず振り返った。そこに立っていたのは、先ほど姉と一緒にいた二人組の内一人ある。
隆也だった。彼は勇司を真っ直ぐに見つめて、同じ質問を繰り返した。
「店を立て直したいのか？」
「な、何だよ。あんた誰なんだよ？」
訝しそうに質問で質問に答える勇司に、ふと隆也は苦笑しながらつぶやく。
「君みたいな奴の味方、をさせられているんだ」
「え？」
勇司は目をぱちくりとさせた。それは奇しくも、店の中で姉とその友人がしている仕草

とまったく同じであった。

〇

「俺は小さい時に母ちゃんを亡くして、どういう人かは、ほとんど覚えてないんだよ」
　場所を近所の公園に移し替え、勇司は隆也に自分の心情を語り出した。どこか寂しそうな、それでいて溌剌とした顔で。
「でも、母ちゃんがあの店で楽しそうに仕事をしていたのは覚えてる。何か暗い店が、母ちゃんが入っただけで明るくなるんだよ。姉ちゃんも父ちゃんも、笑いながらそれを手伝っていて……しばらくして母ちゃんが亡くなってからは、それでもあの店は頑張ってやっていこうと、二人とも必死だったなぁ」
「なるほど。君にすればあの店は思い出が詰まっている大切な場所なんだな」
「まぁね。あ、俺のことは勇司でいいよ」
　勇司は大人ぶってそう言ってみせてから、うんうんとうなずいた。
「俺だけじゃないんだ。きっと姉ちゃんも父ちゃんも、本当はあの店のこと大切にしていて、諦めたくないはずなんだ。そうじゃなきゃ、二人とも何だかんだで店に出ているはずないだろ」
「そうだな」
　隆也は適当に相づちを打ったが、その実はどっちとも判断がつかなかった。大人になれば、惰性というものが日常を支配する。しかしその事を小学生に説明するのは、難しいか

もしれない。
　代わりに、公園の中を首を巡らせて見つめる。ブランコと滑り台、それに自分達が腰掛けているベンチがある程度の簡単な児童遊園だ。休日だというのに、誰もいない。最近は田舎の地方都市でも、外で遊ぶ子供が減ってきたのだろうか。
　そんな公園内を、隆也と同様に眺めながら、勇司がつぶやいた。
「俺さ、あの店だけじゃなくて、この町ももっと流行ればいいと思うんだ」
「え？」
「この町が賑やかで人がいっぱいだったら、うちにももっとお客さんが来てくれるのに。それに、その方が友達も増えて楽しいと思うし。何とか、そういうのできないかなぁ」
　そう言って笑う顔に、なぜか来夢の影が重なった。
　二人とも似ている。町の発展を願う人間として。いや、彼らだけではない。今まで隆也が会ってきた人間の中にも、自分の居場所を大切にする者達がいた。彼らも、自分の住むこの町が栄えることを、祈っているに違いない。
（それでも俺は）
　この町が好きにはなれない。彼らほどには。
　しかしこの時隆也は、おぼろげに自分が目指したいものが見えてきたような気がしていた。
「そうだな……そうだよ」
「どうしたんだ、独り言なんか言って？」
「いや、何でもない」

気味悪そうな目で見られたが、気にせず隆也は笑った。
「それより勇司、ハイランドをどう立て直すつもりなんだ？」
「それは、まだ決めてないけど……」
というか、答がわからないのだろう。小学生にそこまで求めるのは酷な話である。
隆也は再度笑みを浮かべると、
「わかった、それじゃ俺達の手伝いをさせてやる……いや、俺達にお前の手伝いをさせてくれよ。一緒にハイランドを復活させようぜ」
「本当っ？」
「ああ。それにはまず、お前の姉ちゃん達を説得しないとな。こればっかりは、素人だけで考えてもしょうがないし」
つぶやき、古びた喫茶店のある方角に目を向けた。

「うーん」
ひかりの第一声はこれであった。困ったように自分の部屋をぐるぐると目だけで見回している。
そこに映るのは、落ち着いた色彩の壁紙と絨毯、後はごく平凡な女子高校生が持っていそうな内装の数々、そして三人の顔くらいなものだが。
三人。つまり、隆也と来夢と勇司である。
彼らの顔を眺め回してから、ひかりはもごもごと言葉を続けた。
「そんなにプッシュされても、私としてはもうどうでもいいことだし。父さんも、喫茶店

をたたむって言ってるし。ハイランド復活って言われてもねぇ。やりたいのを止めたりはしないけど。でも」

積極的に関わりたくない。そんなニュアンスを漂わせつつ、目線を下に下げた。

無論、経営立て直しについてである。隆也が勇司を連れてハイランドに帰ってきた後、来夢と共に二階のひかりの部屋に上がった。当然ながら、勇司と共に彼女を説得するためだ。

しかしひかりは乗り気ではなかった。弟である勇司が頼み込んでも、対応はぬかに釘といったところだ。完全に否定していない当たり、まだ見込みはありそうだが。

(こりゃ、出直した方がいいか?)

隆也が判断した時、来夢が正座した膝を突き出すように身を乗り出した。

「でも、ひかりちゃん。どうにかならないかなぁ、って言ってたじゃない」

「……あの時のは愚痴だから。別に本気で経営をどうにかして欲しいって思ったわけじゃないし」

「本気でもないことを、わざわざ愚痴で言う人間はいないと思うよ」

来夢の言葉に、ひかりは、はっ、と目を開いた。隆也も驚いた表情で、幼なじみの方を見る。

こいつは普段バカなくせに、時々鋭い発言をするから侮れない。

「そうだな。もちろん愚痴の中には、冗談交じりに言うものもある。だけど、話題を振る場合は、大体本音から入ることが多いだろ。お前だって何か期待してたから、来夢にそういう話をしたんじゃないか」

「べ、別に、そういうわけじゃ」
　隆也のフォローに、ひかりは目を泳がせていた。自分の言葉が本意でないことは、如実にその表情が語っている。
　後押しとばかりに、勇司が叫んだ。
「そうだよ、姉ちゃん。姉ちゃんも昔、よく俺に母ちゃんのことを語ってくれただろ。母ちゃんがコーヒーを運ぶ姿が、とても綺麗だったって。自分もそういう給仕ができるようになりたいって。そういうの、全部忘れたのかよ！」
「おー、熱いな」
「若いよねぇ」
　小学生のひたむきな姿に、思わずほんわかとしてしまう、隆也と来夢。
　馬鹿にしているわけではない。必死に姉を説き伏せようとする小さな後ろ姿が、好もしく、そして頼もしく感じるのだ。
　一方ひかりは、考えこむようにずっとうつむいていた。弟の叫びに、思うところがあるらしい。
　しばらくしてから、ふぅ、とため息を吐くと、
「参った、参った。降参」
　両手を挙げて笑ってみせた。
「私もね、本当はこの店がつぶれるの、少し寂しいなって思ってたんだ」
「それじゃ？」
「まぁ、やれるだけやってみようよ。とは言っても、私も経営とかに詳しいわけじゃない

からね。精々できるのは、お父さんに甘えることくらいかな」
　顔を輝かせる来夢に、混ぜっ返すようにウィンクする。
　これでも、彼女なりに勇気のいる決断だったのだろう。諦めるというのは簡単な選択肢だ。それを放棄したということは、彼女は苦を背負う覚悟を決めたということになる。
　しかし、弟がそれを背負っているのに、姉として知らんぷりはしていられなかったのだ。たとえ、弟よりも現実を知っていたとしても。いや、知っているならなおさら。
（いいな、兄弟って）
　隆也はそんなことを考え、この二人のためにも何とかハイランドを復活させたいと思った。
　しかし、思わぬ障害が待ち受けていたのである。

「ダメだな」
　一階に降りて、事情を話したひかり達を、父親でもある店主は無情にも切り捨てた。手に持つ競馬新聞と、ごつくて太い眉の間に、しわが寄る。
　勇司はぽかんと口を開いていたが、やがて憤るように問いかけた。
「どうしてさ？」
「どうしてもだ。この店はもう終わったんだ、立て直すことなんてできるわけないだろう。子供がわかったような口を利くんじゃない」
「ちょっと待ってよ、父さん！　私達も、ずっとこの店で育ってきたんだよっ？　そんな簡単に、終わったとか言わないでよ！」

援護するようにひかりが叫んだが、しかし父親は新聞から目を離して、じろり、とそちらをねめつけると、
「現実には、どうしようもないことがあるんだ」
「どうしようもないって言うけど、お客さんが減り始めてから何かしたっ？　それどころか、もう何年も店の改装すらしていないじゃない！　何もしないで、どうして簡単に諦めるのっ？」
　これに関しては、ひかりが言うなと思わないでもなかったが、他人が言うのはやはり我慢ならないらしい。それに、彼女自身腹をくくったせいもあるだろう。
と、その言葉に反応するように、店主は低くつぶやいた。
「改装、だと」
「そうだよ。お店の感じももっとこう明るくなるようにしてさ。大体このお店、全体的に暗すぎなんだよ。父さんの腕は悪くないんだし、店の雰囲気を変えたらお客さんも戻ってくるんじゃないの」
「俺もそう思う。何か幽霊でも出てきそうだし」
　子供二人が、両手を挙げてうんうんとうなずく。
この時、店主が寂しそうな目をしたのを、隆也は見逃さなかった。
「改装か。確かにこの店は、殺風景で薄暗いかもしれないな」
　自嘲するような物言いに、子供達が期待を持って父親を見つめる。説得に動かされたのだと思ったのだ。
　しかし、

「それでもな。ひかり、勇司……私が母さんと一緒にやってきた店は、これなんだ」
「え」
「母さんが嫁いできてから、ずっとこの内装にしてやってきたんだ。いや、内装だけじゃない。店の雰囲気も、メニューも、母さんと一緒に作り上げてきた。父さんにとっては、ハイランドはこの内容でなければ意味がないのだよ」
その言葉に紛れもない哀愁を感じて、子供二人は黙り込んだ。
今度は子供達に優しく微笑みかけると、店主は言葉を続けた。
「お前達には心配ばかりかけているな。大丈夫だ、新しい仕事先も友達のコネで探しているから。何も案ずることはない」
「お父さん……」
「でも……」
ひかりと勇司は言葉を探したが、何も見つからないようだった。かといって納得したわけでもないのだろう。不服そうに、そして悲しげに父親を見上げている。
「あの」
来夢が腕をのばしかけた。フォローを入れようとしたのだろう。
店主は妻との思い出に囚われている。少なくとも隆也はそう思った。来夢もそれを感じ取ったのだからこそ、口を挟もうとしたのだと思われる。
が、それは叶わなかった。隣の隆也が制止したからである。
「やめろ、来夢」
「隆くん！　でも……」

「俺達ができるのは、あくまで手伝いだけ。ここから先は、あの家族が決めることだ」
　そして、彼は姉弟の方に視線を移す。
　とりあわけ、この店と町に強く想いを馳せている、弟の方を。
「まぁ、あいつなら何とかするだろう」
「え？」
「いや、何でもない。それより、今日はこの辺が潮時みたいだな。一端帰るぞ」
「あ、待ってよ隆くん」
　そして二人は、重い空気が支配する店内を、そっと出ることにした。

○

　数日後の放課後。相変わらず机に向かって勉強をしている隆也のところに、来夢が飛び込んできた。
「隆くん！　ひかりちゃんのお父さんが、お店を直すのに賛同してくれたんだって！」
「そうか」
　隆也はうなずくと、おもむろに勉強道具を片づけ始めた。来夢が目を瞬かせる。
「あれ？　あまり驚いてないね？」
「まぁ、そうなると思っていたからな」
　そして勉強道具をしまってから、来夢の方に向き直る。
「で、今からそのことについて会議に行くんだろ」

「うん。すごい、隆くん。良くわかったね」
「お前のことなら大体わかるさ」と言おうとして、隆也はやめた。何だか気恥ずかしくなったのである。
代わりに彼女の肩を、できるだけさりげなく叩いて言った。
「さ、行こうか」
「うん」
来夢は嬉しそうな笑みを浮かべた。

説得の決め手は、やはり勇司の言葉だったらしい。
彼は説得のために開いた家族会議の際、こう父親に言ったのだ。
『この店は、父ちゃんと母ちゃんだけのものじゃない。俺や、姉ちゃん。そしてこれからずっと、この店を継いでいく人達のものなんだ！　それを、父ちゃんと母ちゃんの思い出だけで、終わらせていいのかよ？　母ちゃんはそれで納得するのかよっ？』
「自分の息子に泣きながらそんなこと言われれば、父さんだってそりゃ折れるしかないわよねぇ」
「な、俺泣いてなんかないぞ！　そういう姉ちゃんこそ、隣でべそかいてたじゃないか！」
「かいてないわよ！　適当なことを言うなぁ！」
ハイランドの店内にて。顔を赤くしながらそんなことを言い合う姉弟を、隆也と来夢はほほえましそうに見つめていた。
ひとしきり姉弟喧嘩という名前のじゃれ合いが終わると、隆也は本題に話を移すことに

する。
「じゃぁ、親父さんの許可は取れたってことでいいんだな？」
「ええ、おかげさまで目が覚めました。ここまで店のことを思ってくれる子供がいるのですから、私もそれに応えてやらないといけないなと思いましたよ」
答えたのは、カウンターの向こう側に立つ店主だった。今日は新聞も広げず、ラジオも聞かず、前とは打って変わって柔和な表情でこちらを見ている。
「でも隆くん、どうやって店を復活させるの？」
「それが……今のところ具体的なアイデアはまだ浮かんでないんだよなぁ」
隆也は後頭部をかいた。数日の間、彼なりにそのことは意識にとどめていたものの、特に名案と思しき知恵は浮かばず、現在に至っているのである。
何度も言うようだが、彼は喫茶店経営の経験はない。素人だ。それが本職であるハイランドの店主をさしおいて、グッドアイデアが浮かぶとは思い難かった。
「さて、どうしたものか」
つぶやいた時、勇司が父親の方をちらりと見た。
「それなんだけど。ちょっとだけ、こっちでそのことについても考えてさ。もう少しで解決策が浮かびそうだったんだよな、父ちゃん」
「ああ、あれか」
父親がうなずいて、一冊の雑誌を取り出した。週刊の情報雑誌で、大衆的なものから社会的なものまで、色々と記事を取り扱っているらしい。
「これの記者の一人が、この喫茶店の常連なんですよ。今も時々コーヒーを飲みに来るこ

ともあって、この店は懇意にしてもらっているんです」
「あれ、じゃぁその人に頼んでこの店を取り上げてもらえばいいんじゃぁ？」
　来夢の疑問に、隆也もうなずいた。しかし店主はかぶりを振ると、
「それは、この店を諦める前に私も考えました。それで一度打診したことがあるんですが、どうにも色よい返事がもらえなくて。一つは、この喫茶店は古くさくはあるものの、華がないこと。華がない写真を雑誌に載せることはできないというのです。もう一つは、本人曰くですが、浅薄なグルメ記事はあまり取り扱っていないから、とのこと。編集長が、そういう企画は散々とやって、正直うんざりしているそうなんです」
「はぁ」
　よくはわからないが、マスメディアにはマスメディアなりの矜持があるらしい。隆也としては、何だよ頭固いな、という感想しか出ないが。
　もちろん、そんなことを口に出す非礼は犯さず、腕を組んで別の言葉をつぶやく。
「つまり、喫茶店の紹介は軽々しくできないと」
「ええ。華に関しては、改装でもすれば何とかなりそうですけどねぇ」
　店長は店の改装まで決意しているらしい。妻との思い出がつまっている、店の雰囲気を変更してでも、子供達に報いようと考えたのだろう。
　それはそれで結構だが、改装をしたくらいでは正直微妙だというのが隆也の率直な意見だった。この店を知らない人間には、ただの綺麗な喫茶店程度にしか映らないだろう。
「隆くん、何とかならないの？」
　来夢が不安げに尋ねてくる。

言うまでもなく、隆也は必死に知恵を絞り始めた。
何とか、アイデアの足がかりができた気がする。後はそこから崖を登っていくルートを探していくだけである。
頭の中で、様々な可能性の考案と、その取捨選択が行われていく。
やがて、ピンッ、とひらめいた。
「ああ、そうか。今のこの店だから、出来ることがあるんじゃないか」
「え？」
「お願いがあるんです。その記者に連絡を取って下さい。それから、こういう企画を持ちかけて欲しいんです」
隆也の説明に、店長のみならず、その場の全員が目を大きく開いた。

○

数週間後のある日、一つの週間雑誌が発売された。
それを手に取った読者は、喫茶店の写真が載っている記事を見つけて首を傾げる。
その喫茶店が、あまりにも薄暗く、色あせているために。まるで、閑古鳥が団体で留まって鳴いていそうなイメージを受ける。
記事をよくよく見ると、それは別段飲食店を紹介する記事ではなかった。大きなゴシック体で書かれていた題字は、以下のようなものだったのである。
『古からの静寂が降りる。骨董の喫茶店』

記事の内容は、この喫茶店がいかに古びているか。そして薄汚いかを書き表したものだった。複数の写真があちこちに貼られ、その陰惨さがにじみ出てくる。
そしてその上で、次のようにまとめられていた。
『次週、この店が生まれ変わる？　画期的ビフォアー&アフターを見逃すな！』
そう、この記事は連載物であった。
「まさか、いきなり『この店をもっと汚くしろ』と言われるとは思わなかったよ」
そう言って笑いながら、勇司はわざとらしく腹を抱えてみせた。
隆也がハイランド復活のためのアイデアを述べてから、数ヶ月後。ハイランドにはわざわざ遠くから足を運んできた者もいるらしい。中には雑誌の記事を読んで、遠くから足を運んできた者もいるらしい。
そのハイランドの二階、勇司の部屋にて。隆也は特に悪びれもせず、すました顔でこう答えた。
「この店のことを知っている人間が、改装されて綺麗になったと知ったら驚くだろうと思ってな。だったら、先にこの店の状況を記事にした方がいいんじゃないかと思ったんだ。後で店が綺麗になったことを知れば、読者は興味がわいてやってくるかもしれないし。そのためには、店にはもっと汚い状態である必要があったんだよ。その方がインパクトあるから」
そして、ふと微笑を浮かべる。
「でも、正直俺も驚いてるんだ。まさか連載記事にまでなるとは思わなかったからさ。そ

れは記事を書いてくれた人の手腕だから、その人には感謝するべきだろうな」
結局、記事を取り扱ってくれた人には隆也は会っていない。子供が言ったことがストレートに通るとは思わないし、稚拙に感じられる可能性があるので、すべてハイランドの店主を通してもらっているのだ。
そして計画通りにことが進んだのだから、店主の人徳にも感謝すべきであろう。
今頃その店主は、客を相手にのんびり商売をやっているはずだ。新しく綺麗に生まれ変わった、喫茶店の中で。ウェイトレスをやっているひかりと、なぜか（恐らくその場のノリで）ウェイトレスの手伝いをやっている来夢も、同様に楽しく働いているに違いない。
と、勇司が頭を両手の後ろに組んでつぶやいた。
「あーあ。俺も早くこの店で働けるようになりたいな。姉ちゃんがうらやましいよ」
「そんなにハイランドで働きたいのか？」
「当たり前だ。俺が労働力になったら、見てろよ。きっとこの店、Ｎ市で一番の店になるぜ」
得意そうに胸を張る勇司を、隆也はきょとんと見る。
「Ｎ市で一番ねぇ。それって、そんなに凄いことか？」
「当然だろ。こんな田舎町でも俺の住んでる町なんだから。ここで一番になればすっげぇ嬉しい。故郷にニシキをかざるって奴だよ」
「それは違う」
使い慣れない諺を誤用している小学生に、苦笑する隆也。
それにしても、と彼は心の中でつぶやいた。ここまでＮ市に傾倒できるとは、この少年の愛郷精神は本物なのだろう。

彼だけではない。ひかりも、店主も、そして今まで会ってきた色々な人物も。多かれ少なかれ、N市が好きに違いないのだ。
(じゃぁ、俺は？)
言うまでもない。
隆也は一度瞑目すると、次には立ち上がってのびをしてみせた。
「さてと。それじゃそろそろ来夢拾って帰るか。店の様子見に来ただけなのに、大分邪魔してしまったからな」
「あ、うん」
勇司は一瞬寂しそうな顔をしたが、次の瞬間には笑って親指を立ててみせた。
「隆也の兄ちゃん」
「うん？」
「ありがとう、店を助けてくれて」
その心から嬉しそうな笑顔は、誰かのものと被った。
隆也は黙って親指を立て返してみせると、部屋の扉を開けた。

○

駅前から、隆也と来夢の家までは結構な距離がある。しかも今は夕暮れを超えた時間であり、バスも――N市が田舎だからかもしれないが――もうない。
従って、隆也は来夢を連れてとぼとぼと国道沿いの歩道を歩くしかなかった。

「まったく。お前が調子に乗って、ウェイトレスのまねごとなんかするからだぞ」
「だって、楽しそうだったんだもん」
実際に楽しかったたし。そう笑顔で付け足しながら、来夢は彼の隣を軽やかな足取りで歩いていく。
隆也はそんな彼女の横顔を眺めていたが、やがてある決意を固めた。それはいずれ言わなければならないことで、それなら今言っておいた方がいいと思ったのだ。
気づかれないように深呼吸をしてから、やがて口を開く。
「あのな、来夢」
「うん？」
「俺、考えてたことがあるんだ」
彼は前を向いたまま、隣に来夢の視線を感じつつ、言葉を続ける。
「俺にとって、このＮ市って何なのか。本当に俺はこのＮ市が嫌いなのか。そんなことを考えてた」
「隆くん……？」
「だってそうだろ。お前や勇司みたいに生まれ故郷が大好きな人間見てると、やっぱりそう思うわけだよ。で、考えている内に結論が出たんだ」
そして、彼は来夢の方を見た。
「俺、Ｎ市の事が……やっぱり嫌いだわ」
「え？」

一瞬、来夢が泣きそうな顔をする。それはそうだろう。好きなものをいきなり否定された上に、来夢の名物探しの目的には、隆也にN市を好きになってもらうというものも含まれていたはずだ。

だが、隆也は今さら意見を翻すつもりはなかった。

「俺は、お前達みたいにはなれねーよ。この町が、生まれ故郷が好きになれない。それはもう、どうしようもないことなんだ」

「…………………」

隆也の言葉に、来夢の表情が沈み込んでいく。いつもは明るい彼女の顔から、覇気が抜けるのを見るのは、辛い事だった。しかし、それだけでは終わらない。少なくとも隆也はそう願い、さらに言葉を続けた。

「だけどな、そんなに悲観した事でもないぜ。お陰で俺は、もう一つ大事な事に気づいたからな」

「大事な、事？」

「ああ。俺はN市が嫌いだ。嫌いって言うか、あまり好きになれないってだけだけど。まぁ、それは確かだ。でも……生まれ故郷を好きで、一生懸命応援している奴の気持ちがわからないわけじゃない」

一瞬躊躇してから、ややぁと口を開く。

「俺は、そういう人間は好きだよ。お前……や勇司みたいな」

勇司を付け足す当たり、若干自分はヘタレかなと思った。

しかし、それで来夢にとっては充分だったらしい。彼女は嬉しそうに頬を染めると、
「本当、隆くん？」
「ああ。これからも俺は、そういう奴の味方であってもいい。いや、味方でいたいんだ」
「じゃ、じゃぁ。これからもＮ市の名物探しを、手伝ってくれるの？」
「あ、それは無理」
　あっさり言ったせいだろうか。来夢が少しつんのめる。
「ど、どうしてっ？　さっき味方でありたいって言ったじゃない」
「いや、無理って言っても、しばらくの間だけなんだ。具体的に言うと、一年くらい」
「へ。一年？」
　目を瞬かせる来夢を見つめてから、さぁ本題だぞ、と隆也は思った。
　彼は何となく、歩道の縁石の上に飛び上がってバランスを取る。
「俺さ、ずっと都会の大学に入るために勉強してきたけど、将来をどう生きるかまでは考えてなかった。でも最近、何となくそれが見えてきたと思う」
「将来？」
「ああ。さっきも言ったけど、俺は故郷を応援しているには協力していきたいと思う。今までのような名物探しみたいな小さなものじゃなくて、ちゃんと町を興すことのできるような、そういう偉い人間になりたいんだよ」
　右にバランスを崩し、おっとっとっと体勢を立て直してから、来夢に振り返る。
「だから、俺は色々なことを勉強したい。そういうチャンスがあるなら、積極的に参加していきたいと思うんだ。わかるか？」

「う、うん。わからないでもないけど」
それがどう一年間と繋がるの？　そう視線で尋ねる来夢に、隆也は息を吸うと、
「俺さ、来月からアメリカに留学するつもりなんだよ」
「……え？」
隆也の言葉に、来夢の動きが止まった。右手が何かを掴むように挙がるが、すぐに力なく降ろされる。
隆也は構わず、縁石から飛び降りた。
「まぁ、留学と言っても一年だけどさ。出来る限りのことを学んで来るよ。だから、その間お前と名物探しをすることはできない。一時休業だ」
「うん……」
「何だよ、そんな顔するなよ。たった一年会えないだけだろ。別に今生の別れってわけじゃないし、戻ったらまた名物作りを手伝ってやるって」
そう言いながら、実際に辛いのは自分の方だと思った。
自分は、来夢のことが好きなのだから。そして、来夢が自分のことをどう思っているか知らないが、このお子様の事だから異性としては認識していないだろう。
(まったく、つくづく俺の方が貧乏くじ引いてるよな)
「さ、この話はこれくらいにしてさっさと帰ろうぜ。夜遅くになったら、お前のおばさんに俺まで怒られてしまう。留学後の事は、俺が留学してから考えればいい」

「うん……そっか。そうだね」

背中を叩かれうなずく来夢は、すでに彼女特有の人なつこい笑みに戻っていた。

隆也はそれを見て、自分がどう決意を固めたのであれ、来夢は変わりなく来夢なのだなと、寂しくも安堵するのであった。

NONSTOP

響け、
私たちの歌声
Illustration: うらら
広野未沙

あらすじ

　不幸な事故で滑り止めだった優華女学院高等部に通うことになってしまった有香は、クラスメイトのひかりに誘われて、弱小合唱部に入部する。自分と似た環境だった部長の菜々子のように「自分の居場所を見つけるため」に。突然母が転校話をもってきた。菜々子に相談する有香。一方偶然耳にしたひかりはショックを受ける。すれ違う二人。有香はひかりに優華女学院に残ることを伝え仲直りをする。

土田菜々子（つちだななこ）

優華女学院合唱部部長。高三。成績優秀で教師の信頼も厚い。さばさばしている。

酒井有香（さかいゆか）

高一。受験日当日の事故により優華女学院に通うことに。平凡な家庭で育った平凡な女子高生。

友枝ひかり（ともえだひかり）

有香のクラスメイト。純粋培養のお嬢様。誰もが認める美少女。合唱部。

第五話　このときのために

優華女学院の合唱部の活動は、平日は午後六時に終了する。
「お疲れ様でした！」
その声を合図に、脇に寄せた机と椅子を元の位置に戻し始める。それが終わると、解散だ。各学年二人ずつしかいない部員は、だいたい同じ学年同士で音楽室を出て行くことが多い。
「準備できた？」
一年生の酒井有香は同じく一年生の友枝ひかりに声をかける。ひかりは大きくうなずいた。すでに右手には茶色のかばんを持っている。
「うん」
音楽室にはまだ三年生が残っている。きっと部誌を書いているのだろう。
「お先に失礼します」
二人で声を合わせて挨拶する。部長の土田菜々子と副部長の月岡若菜が顔を上げる。

「はい！」
「お疲れー。明日忘れないようにねー」
「お疲れ」
　明日は土曜日だけど部活がある。きっと若菜はそのことを言っているのだろう。普段、合唱部は、土日に練習することはない。けれど、明日は特別だ。
なんてったって、四月からずっと目標にしてきたヴォーカルアンサンブルコンテストが来週の日曜に迫っている。明日と次の土曜日は、特別に練習があるのだ。
　音楽室を出る。吹奏楽部はまだ練習をしているらしく、楽器の音が聞こえてくる。
「いよいよ来週だね。有香ちゃん」
アンサンブルコンテストは、県大会で順位が出るだけで、特に上の大会があるわけではない。どちらかというと三年生が引退し人数が少なくなった新体制での力試しみたいな部分が大きいようだ。
　もっとも、優華女学院の場合、このコンテストを集大成と位置づけているのだけれど。
　課題曲は特になく、制限時間六分以内で好きな曲を歌う。六分以内であれば何曲歌ってもかまわない。ということで、優華女学院では二曲歌うことになっている。三声のミサより「キリエ」と「グローリア」。キリエは楽譜にして二ページくらいの短い曲だから、グローリアがメインといっていい。
　初めてのラテン語の曲は有香にとっては難しかったけれど、何とか暗譜もした。
　あとは、表現に気をつけながら、練習を重ねるだけ。
「なんかどきどきする」

「今から緊張は早すぎだよ」
他愛もない話をしながら、廊下を歩く。
有香にとって、ひかりは合唱部に誘ってくれた大切な友人だ。
不本意な理由で優華女学院に入力することになった有香に、高校生活の楽しさを教えてくれたから。中学時代は体育会系だった有香にとって、合唱部の活動は刺激的なことで一杯だった。
「有香。ひかり！」
「うわっ」
ふいに声をかけられて、ひかりが思わず声を出した。大きな目を丸くしている。有香も、声こそ出さなかったものの、本気で驚いた。
「そんなに驚くこと？」
現れたのは、二年生の木浦めぐみと金澤亜美だった。
「驚きますよ！」
ひかりが大きな声をあげて抗議している。
「悪い悪い。そこまで驚くとは思ってなくて」
めぐみがぽりぽりと頬をかく。
「何か、あったんですか？」
有香が尋ねると、金澤と木浦が顔を見合わせた。
「ちょっとね」
代表で金澤が言う。

「三年生に内緒の話？」

十一月も半ば近くになれば、六時にはすっかり外は暗くなっている。冷たい風が身にしみる。中にはコートを着ている生徒もいた。ちなみに、有香は毎年十二月までは我慢することにしている。今から寒いなんて言っていたら、きっと冬は越せない。

駅前のファーストフード店。中に入るとほっこり暖かい。学校帰りの学生などでそこそこの賑わいを見せている。

「ごめんね。こんなところまで連れ出しちゃって」

そう言って、木浦がウーロン茶を口にする。三年生に万が一でも聞かれると困る、とわざわざファーストフード店を選んだのは、木浦だった。四人がけのテーブルに同じ学年が隣り合って座る。

有香も夕食が近いのでさすがにハンバーガーを頼む気にはなれなかった。温かいのが飲みたかったので、紅茶にする。少し迷ってミルクを入れた。金澤も同じホットティー。ひかりはオレンジジュースを頼んでいる。一応、大会が近いので、のどに刺激があるものはよくない、と炭酸は自重することにした。

「別にあたしは帰り道だからかまいません。家も近くですし」

「私も連絡入れたから大丈夫です」

どうやらひかりはファーストフード店自体足を踏み入れたことがないらしく、好奇心に目を輝かせている。本当はハンバーガーセットを頼みたかったようだけれど、夕飯があるよ、の言葉に渋々諦めていた。

「それで、三年生に内緒の話ってなんですか？」
　ひかりの言葉に、木浦が口を開く。
「まあ、秘密っていっても、毎年恒例だからたぶん、なんとなく感づいているとは思うんだけどね」
　うんうん、と隣の金澤がうなずいた。
「来週の大会で先輩二人も引退じゃない？　毎年、発表後にプレゼントをあげてるの」
「プレゼント、ですか？」
「そう。みんなでお金を出し合って、だから千円くらいのものだけどね。で、一年生に買ってきてもらおうと思って。本当はもっと早く伝えるべきだったんだけど、忘れててさ。ごめんね」
　木浦が申し訳なさそうに手を合わせる。
「私たちは、プレゼントを買えばいいんですか？」
　ひかりが尋ねる。
「そうよ。ただ、最後まで一応名目上はサプライズだから、あまり大きくない方がいいかな。大会の帰りにあげるっていうことになるから、持ち運びしやすいものの方がいいかも」
　金澤の答えを木浦が継ぐ。
「そうそう。少し前の先輩で、大きなぬいぐるみ選んだ人たちがいて、持ち運ぶのも大変っていうか、最初からバレバレだったことがあるから。まあ、バレバレっていえばバレバレなんだけどさ、気持ちの問題っていうの？　最初からあからさまだと面白くないじゃない？　あと、小さくても重いものは却下した方がいいよ」

「わかりました。――有香ちゃん、明日練習の後、暇？」
「……特に用事はないよ」
「って感じみたいなので、明日見繕ってきます」
「ありがとう。期待してるよ！　でも、ほんと早いよねー。もう十一月かあ。少し前まで今年新入生入るのかって心配していた気がするよ。結果二人も入ってくれたから万々歳だけどさ」
本当に二人だけでよかったのだろうか。そう思わないでもないが、木浦の呟きはつっこまないことにした。別の形で金澤が拾う。
「ああ。めぐみも？　私もそう思う。気づいたら、もう受験生になるのも近いんだよ。内部進学希望でもさ、学科選抜という高い壁が」
「そう考えると土田先輩はすごいよね。受ける大学知ってる？」
そう言って、木浦は東京にある超有名私立大学の名前を挙げた。
「うわー。もし受かったら、優華始まって以来の快挙じゃないの？　あー。頭を分けて欲しい」
どうやら金澤は受験によほど思うことがあるらしい。頭を抱えている。
（もう十一月なんだ）
この部活の門を叩いたのが四月のこと。有香なりにがんばっているうちに、あっという間に半年以上が経っていた。
「でもさ、三年生がいなくなったら、一気に寂しくなるよね」
木浦がぽつりと言った。三分の一がいなくなってしまうのだから。それは、どこの部活

でもきっと同じなのだろうけど。
「特に、私と有香は、パート一人ずつになるから、頑張らないとね」
（――あ）
　そうだ。すっかり忘れていた。
　三年生が引退する、ということは、同じアルトのパートリーダーである菜々子がいなくなるということだ。
（あたし、一人で歌えるのかな）
　音取りのために、メロディを鍵盤でなぞるくらいはできるとは思うけれど。それでも。
「どうしたの。有香ちゃん。何か心配事？」
「……なんでもないよ。先輩のプレゼント何買おうかなって」
「無難なのはマグカップとかだよね。でも、無難すぎてつまらないよね」
「明日いろいろ見ればいいじゃない。予算っていう問題もあるんだしさ」
　木浦がにっこりと笑う。
「なんだかけっこう遅くなっちゃったね。そろそろ解散する？」
　木浦の言葉に、誰も異は唱えなかった。

　みんなとは駅で別れる。車が迎えに来ているひかりはもちろん、二年生二人も有香とは別方向だった。
　三年生のプレゼント選びは明日、ひかりと共に明日いくことにした。細かい話は明日詰めることになっている。

自分の家への道を歩きながら、有香はぼんやりと考える。
（土田先輩がいなくなる……）
もともと、合唱部に入ったのは、ひかりに誘われたからというのもあるが、菜々子の存在が大きかったのも確かだ。
ほとんどの生徒が付属の短大に内部進学する中、一人、高いレベルの学校を受験しようとしている菜々子。菜々子ほどのレベルではないけれど、外部進学を目指す有香にとって、見本になると思った。実際、菜々子の話は刺激になった。
そして、歌でも頼りにしている。
一人で歌うとどうしても他のパートにつられがちになってしまうのを、必死に菜々子の声に耳を澄ませ、音を合わせることで防いでいるのだ。菜々子の声にはずいぶん助けられている。前に、各パート一人ずつで歌ったとき、有香はつられないように努力するのが精一杯で、他の声など聞く余裕がなかった。
菜々子がいなくなったら……。
きちんと自分は歌えるのだろうか。
（早いなあ）
泣いても笑っても、三年生がいるのはあと一週間。
他の部活だったら、とっくの昔に引退していてもおかしくないのだ。贅沢は言えない。
（私も、がんばらなくちゃ）
最高の結果を残して、三年生を送れるように。

「どうしたの？　酒井さん。なんだか今日は力んでるみたいだけど」
「え？」
　菜々子に声をかけられたのは、土曜日の練習中のことだった。今日は発声練習の後は、ずっと顧問の相澤先生の指揮の下、みんなで曲を合わせ続けている。今は、ほっと一息中だ。曲の完成度も上がってきたように思える。有香の楽譜は、書き込みで一杯になり、一目見るだけで使い込まれているのがわかるようになっていた。
　土曜日。練習時間は、午前九時から午後十二時までの三時間。普段の練習が一時間半であることを考えると、その二倍になる。
　前半はキリエの練習だった。もっともキリエは短いので、練習時間の大半は二曲目のグローリアに割かれることになる。
　歌っているときは立っているけれど、休憩中はみんなパイプ椅子に座っている。
「そう、ですか？」
　自分としては全然意識していなかったから、菜々子からの指摘に有香は目を丸くする。
「うん。まだ目立つってほどじゃないけど」
「わかりました。ありがとうございます」
(力みすぎ、か)
　自分ではあまり意識していなかったのだけれど、力が入ってしまっていたらしい。
　無理もないよね、と有香は思う。
　だって、ヴォーカルアンサンブルコンテストは、合唱初心者の有香にとって、二度目のステージ。さらに言うなら、初めて結果が明確に出る舞台なのだ。

　以前の合唱祭は、日頃の成果を発表しましょう、というのがコンセプトだった。四月に始動したばかりの団体は、まだまだこれからなところも多かった。けど、今度は違う。三年生が抜けたメンバーでやる他の高校はともかく、優華はこのメンツで歌って半年以上が経っているのだ。完成度が求められる。
　今でも初心者の有香だけれど、この半年ちょっとでそれなりに学んできたこともある。声の出し方。姿勢。息の使い方。他人の声に合わせること。
　合唱は独唱とは違う。みんなの声が合わさって、初めて美しいハーモニーが完成するのだ。
　夏合宿から、有香はずっとそれを意識していた。なるべく菜々子の声を聞いて、他のパートにも耳を澄ませて。
（力、入っちゃってたのかな）
　有香は自分の中で反省会を開く。
「練習始めるわよ」
　相澤先生の声が響いた。部員たちは、返事をして椅子から立ち上がる。
（力まないように）
　有香は自分にそう言い聞かせる。
「今度はグローリアからね」
　相澤先生が指揮棒をあげた。
　三時間の練習は、やはりすごく長く感じられる。十二時を少し回ったところ。おなかも

ぺこぺこだ。
お疲れ様でした、の挨拶をしたとき、有香は妙な開放感を感じた。
机の後片付けが始まる。
今日は、これからひかりと一緒にショッピングモールで三年生へのプレゼントを選ぶ。
「酒井さん」
有香に声をかけてきたのは、顧問の相澤先生だった。
相澤先生は、三十代半ばの国語教師。高校時代の合唱経験を買われて、合唱部の顧問をしている。先生にいきなり声をかけられたことで、どうしても有香は身構えてしまう。
「先生。どうしたんですか？」
「今日は、どうしたの？　力入っていたみたいだけれど」
休み時間の菜々子と似たようなことを言われる。有香は戸惑わずにはいられなかった。
前半。キリエの練習をしていたときはともかく、菜々子のアドバイスを受けて、後半は力まないように努力していたつもりだった。自分では。
え、と声が出そうになったけれど、それを必死で押さえて、有香は先生に問う。
「そんなに力んでましたか？」
「そうね。いつもだったら、土田さんと酒井さんの声がバランスよく聞こえてくるんだけど、今日は酒井さんの声ばかりが聞こえてきたかな。大きな声を出すことは悪いことじゃないのよ。ただ、ちょっと頑張りすぎな気がしたものだから」
ひょっとしたら、前半のことを言っているのかもしれない。有香は自分にそう言い聞かせつつ、尋ねてみる。

「グローリアのときもですか」
「ええ」
　相澤先生は迷いなくうなずいた。
　自分なりに力を抜いて歌っていたつもりだった。菜々子の声をよく聞きながら、菜々子の声に寄り添うように。そう心がけていたはずなのに。
（どうして？）
　がんとショックを受ける。なんとかそれを悟られないように踏ん張った。
「いつも通りの酒井さんでいいのよ」
　先生はにっこり笑って、音楽準備室の方に消えていった。
「……」
「どうしたの？　有香ちゃん」
　ぼんやりと突っ立っている有香にひかりが声をかけてくる。有香は我に返った。なんでもない。そう答えようとした有香だが、少し考えて、正直なところを聞いてみることにした。
「ねえ。今日、あたしの声、目立った？」
「……声？　言われてみれば、菜々子さんより有香ちゃんの声の方がよく聞こえたかも」
　ひかりは人差し指をあごにあてる。
「あ。でも、別に悪いっていうわけじゃないよ」
　ひかりがぶんぶんと両手を振る。
「ありがとう」

有香は微笑んだ。ひかりの心遣いが嬉しい。

そして、少なくとも、菜々子の声より有香の声の方が目立っていたのは確かなようだ。

（どうすればいいのかな）

力みすぎ、だと言われる。でも、自分では力んでいるつもりなど、全くと言っていいほどなかったのだ。

もし、このまま、ずっと有香の声が目立ってしまったら……。

大会も近い。相澤先生が言ったとおり、いつも通りできればいいだけなのに。

どうして。

「有香ちゃん。どうしたの？」

「うーん。力みすぎって言われちゃって。自分ではそんなつもりなかったんだけどね」

首をかしげるひかりに、冗談めかして言ってみる。

「そうなんだ。大会近いもんね」

ひかりはどうやら、大会が近いために緊張している、という解釈をしたらしい。たぶん、そうなのだろう。有香は自分でもそう思う。

「それより、早くショッピングモール行こう？　おなかすいちゃった」

ひかりが大げさにおなかをおさえてみせる。

「そうだね」

お昼は、ひかりの猛烈な希望でファーストフード店に行くことになっている。昨日食べられなかったハンバーガーが楽しみで仕方ないらしい。

「お先に失礼します！」

まだ残っている上級生に声をかけると、有香とひかりは音楽室を出た。

「ひかりちゃんは、何か考えた？　マグカップは禁止なんだよね」

どうやら、去年も一昨年もマグカップだったらしい。

「いろいろ見てみればいいんじゃないかな。雑貨屋さん、たくさんあるし。いいものがあるといいね」

「そうだね」

有香は大きく返事をする。

菜々子にも、そして相澤先生にも言われた「力が入っている」という言葉。

少し気になるけれど、今だけは忘れよう。そうしよう。

月曜日。やはり、発声練習の後はすぐにパート練習になる。一通り曲を歌ってから、それぞれ気になったところを重点的に練習していくかたちだ。短いキリエはほとんどさらうだけで、メインのグローリアが中心になる。

五分間の休憩。有香は楽譜をぱらぱらとめくっては、今までの復習をしていた。

「酒井。もしかして、調子悪い？」

隣に座る月岡若菜が尋ねてくる。

「そんなこと、ないですけど。どうしてですか？」

どうして若菜はそんなことを思ったのだろう。

「少し、声がのどにかかっているっていうか」

若菜は首をひねりながら言う。

「いつも菜々子の声に寄り添っている感じだったんだけど、土曜日あたりからちょっと目立つ感じになってきたのよね。気のせいかもしれないけど」
「わかりました。気をつけてみます」
　声がのどにかかっている。
　合唱のとき歌声は、おなかから出すのが正しいとされている。のどにかかっている、というのはそれが出来ていない、ということ。おなかから声がでていないと言われたのと同じだ。
　おなかをしっかり支えて声を出すというのは、意外と意識していないと難しい。
　それが出来ていなかったのだろうか。
　有香としてはいつも通りにやっているつもりだった。
　足を肩幅にひらき、おへその辺りを気にしながら息を吐き出す。特別変えたところはない。自分ではおなかからしっかり声を出すつもりだった。
　隣とはいえ、他パートの若菜が口を出すくらいだから、それなりに気になるのだろう。ひっかかるのは、若菜が「土曜日あたりからちょっと目立つ感じになってきた」と言っていたことだ。
　土曜日。菜々子と相澤先生から、「力が入っている」と言われた日。
　声が悪目立ちしているのを、若菜は声をのどからだしていることが原因ではないか、と考えたのではないだろうか。
　力が入っているから、悪目立ちして、のどから出ているような声に聞こえるのではないだろうか。

（どうして……？）
どうすればいいのだろう。大会まであと一週間を切ってしまった。
自分では力を抜いたつもりだ。
いつも通りやっているつもりだ。
なのに、違うと言われてしまったら、初心者の有香ではどう修正していいかわからない。
どうすればいいんだろう。
どうしたらいいんだろう。
椅子に座っていた相澤先生が立ち上がる。どうやら五分が経過したらしい。
「じゃあ、始めるわよ。グローリアから」
六人全員が椅子から立ち上がる。全員暗譜。楽譜は椅子の上に置くことになっている。
グローリアはソプラノの独唱から始まる。
たった二人のパート。たった六人の仲間。
自分の声で、素晴らしいハーモニーをぶちこわしてしまったら。
そう思うと、大きな声を出すのが怖くなった。
いっそのこと、口パクでもいいんじゃないだろうか。
このハーモニーを壊さないためなら。

――歌うのが怖い。

ソプラノの独唱が終わる。入るタイミングは指揮をよく見て。

息を吸い込む。
声が目立つのだったら。
歌わない方がいいのではないだろうか。
大会は近い。余計なことで、みんなの足をひっぱりたくない。

「酒井さん。どうしたの？　今日は、声が出ていなかったみたいだけど」
練習終了後。思った通り、菜々子は声をかけてきた。
「……のどの調子が悪いのかもしれないです」
「そう？　大会前なんだから、気をつけてね」
「すみません」
有香は殊勝に謝る。――嘘だった。のどの調子は普通。体調にだって気をつけている。けれど。
いくらがんばっても力んでいる、声が浮く。そう言われてしまうのなら。
有香にはこうすることしか思いつかない。
「有香ちゃん。何かあった？」
ひかりに顔をのぞき込まれる。
「ううん。何もないよ」
ひかりに悟られてはまずい。有香は無理矢理にでも笑顔を作った。

水曜日。

ひかりは自室で机に向かって勉強をしていた。
　マナーモードにしていた携帯電話がぶるぶると震える。ひかりは着信を確認した。どちらかというと携帯電話はメール中心に使用していて、直接かかってくるのは珍しい。
（菜々子さんからだ）
「もしもし」
「もしもし。ひかり？」
　菜々子の声が聞こえてくる。何の話だろう。見当がつかなくて、ひかりの胸はどきどきする。
「そうですけど。どうしたんですか？」
「ちょっと、相談があって。ここ二日間くらい、酒井さんおかしくない？」
（有香ちゃんが、おかしい？）
「確かに……」
　今日も朝から、あまり元気がなかったように思える。部活に行こうと誘うといつもすぐに反応がかかってくるのに、昨日あたりからやや鈍い。ただ、それはほんの些細な違いだった。気のせいかもしれない、と思い直してしまうくらいに。
「やっぱり」
「やっぱり、ですか？」
　菜々子は同じパートの有香のことをよく見ていると思う。
「そう。月曜あたりから、彼女の声が聞こえないのよ」
「声が、ですか？」

――あたしの声、目立った？

土曜日。有香がそんなことを言っていたと思い出す。

いつも有香は大きくのびのび歌っている。最初のうちは確かに回りから浮いていたことはあったけれど、それは合唱初心者なら無理もない話だ。合唱の発声というのは、カラオケなんかで歌う発声とは違う部分がある。ただ、最近はきちんと菜々子の声と合わさって綺麗に響いていたはずなのに。

「大会が近くて、少し力んでいるみたいだから、そう言ってみたんだけど、それがよくなかったのかもしれないわ」

「……。菜々子さんは、どうして、私に？」

「私が尋ねるよりも、あなたが尋ねる方がいいと思ったの。私が言って、酒井さんが萎縮しちゃったのが原因かなって」

「……わかりました」

ひかりはこくりとうなずいた。

「ありがとう。頼んだわよ」

電話が切れる。

（有香ちゃんのためにも、がんばらなくちゃ）

とはいえ、なかなかタイミングを計るのは難しい。

そのことをひかりは次の日思い知るのだった。

一日一日、時間は過ぎていく。大会が近づいてくる。

練習中、有香はあまり声を出さないように心がけていた。これが一番いいのだろう。菜々子も特に何も言わなくなった。きっと有香ののどの調子が悪いと思ってくれているのだろう。パート練習がなくてよかった、と思う。全体練習だけだから、菜々子に有香の声だけを聞かれることもない。

一人で歌ったら、きっと普通に声が出せることがばれてしまう。

木曜日の放課後。

有香の心は重かった。部活に行くのが憂鬱だった。

部活に行くために学校に来ているといってもいいくらいだったのに。

一昨日からは、ずっとこうだ。

(どうしてあたしは、歌が下手なんだろう)

合唱を初めて半年以上。初心者を免罪符には出来なくなりつつある。

初めての大会。楽しみだったはずなのに。

「有香ちゃん」

席に座ったまま、ずっと立ち上がれずにいると、ひかりの方から有香の元へやってきた。

「部活、行こう?」

「うん」

そうは答えるものの、なかなか体が動いてくれない。

「ねえ、有香ちゃん。どうしたの？　最近、元気ないけど」

「たぶん、コンクールが近づいて、緊張してるんだよ」

有香は冗談めかして答える。間違いではない。

昨日も、一昨日もこんな会話を交わしていた。ひかりは、そう、と一応は納得したそぶりを見せてくれる、はずだった。

「最近、あまり有香ちゃんの声、聞こえないのも、それ？」

「え？」

有香は椅子に座ったまま、目を見開いた。ひかりはじっと有香を見下ろしている。

「歌ってるとき、いつも菜々子さんの声しか聞こえない」

「……」

「それはのどの調子が悪いからで」

「違うよ。だって話している声は普通じゃない。どうしたの？」

ひかりは有香の見え透いたいいわけをきっぱりと否定した。

有香は黙ってひかりの顔を見上げる。ひかりの大きな瞳が、じっと有香を見つめていた。

「みんな、心配してるよ。菜々子さんも、月岡先輩も。もちろん、金澤先輩や木浦先輩だって」

有香は唇をかみしめる。

火曜日から、みんな何も言わなかった。

「みんなの足をひっぱりたくないの」

「え？」

有香の呟きのような声に、ひかりが首をかしげる。

「どういうこと？　どうして有香ちゃんが足をひっぱるの？」

ひかりがきょとんとしている。

合唱経験者であるひかりは、やはり歌がうまい。ひかりがグローリア冒頭のソロをやる

という話もあったくらいだ。結局は二年の金澤の方に落ち着いたのだけれど。
「あたしの声、目立っちゃうから」
　有香は言った。堰を切ったように言葉があふれてくる。
　ここのところ、ずっともやもやしていたことを、一気にはき出すように。
「……自分では意識していないのに、力みすぎだって言われて。どうしていいかわからなくなっちゃって。変に目立つくらいなら、いっそのこと歌わない方が……」
「そんなことないよ」
　ひかりが即座に否定する。有香がびっくりするような強さだった。
「そんなことないよ。何のための合唱なの？　みんなで歌うから合唱なんだよ。有香ちゃんが歌わない方がいいなんてこと、絶対ないよ」
　教室にひかりの声が響く。教室に残っているクラスメイト数人が、何事かとこちらを見ていた。それに気づいたのか、ひかりはこほんと小さく咳払いをした。
「だって、有香ちゃん、先週まではきちんと歌えていたじゃない」
「……」
　そうなのだ。先週の金曜日までは、有香は普通に歌えていたはずだ。菜々子だってそう言っていたはず。
「どうして有香ちゃんは力んじゃってたの？　心当たり、ある？」
「たぶん、大会が近いから、意識しちゃってたんだと思う」
「どうして？」
「だって、三年生にとっては最後の大会だし、いい成績残したいでしょう？」

「そういうこと、あんまり気にしなくていいと思うけどな」

ひかりがあっさりと言い放った。有香としては驚くしかない。

「どういうこと？」

「だって、たとえ一位を取ったって、おめでとうございます、で終わりだよ？　あ。賞状はもらえるけど。でも、別に、ここでよい成績をとれたからって、上の大会に進めるわけじゃないでしょう？」

「それはそうかもしれないけど」

ヴォーカルアンサンブルコンテストが、県大会のみで終わる大会なことはわかっている。けれど、それでもやはりいい成績を残してあげたいと思ってしまう。十一月の中旬まで部活を頑張った三年生のためにも。

有香が口にしかけた反論の言葉を、ひかりは封じる。

「それに、音楽って、明確な勝敗があるわけじゃないでしょう？　聞く人によって、評価は全然違うんだよ。極端なこと言っちゃえば、ある人が一番だって評価しても、ある人にとっては気にくわない演奏かもしれない。その逆だって言えるよ。たとえ今回成績悪くったって、私たちが満足する演奏ができたら、それでいいんじゃないかな」

——あたしたちが満足する演奏……。

有香の心に、何かが響いた。

「有香ちゃんが歌わない合唱部の演奏なんて、たとえ一番とれたって、私は満足しないよ。きっと、部活のみんなだって同じだよ」

「……」

有香は大きく目を見開いた。

有香にとって、部活の活動は勝ち負けがすべてだった。そう思っていた。

なのに、ひかりはそれを否定する。

「本当に？」

かすれた声で尋ねる。ひかりは大きくうなずいた。

「本当だよ。だから、部活、いこ？」

有香はゆるゆるとうなずく。

ありがとう、と心の中で呟いた。

「うまく説得できたみたいね」

部活終了後、ほっとした表情で菜々子がひかりの元へやってきた。

有香は今、机の片付けをしている。そんな親友の姿をひかりはちらりと盗み見る。

「遅くなってすみません」

ひかりはぺこりと頭を下げた。

有香が声をわざと小さくしていることは、ひかりや菜々子だけでなく部員みんなが気づいていた。たった六人しかいない部活。一人の異変はみんなが気づく。

「今日無理だったら、私が出て行ったところよ」

冗談っぽく言っているが、菜々子のことだ。本気だったのだろう。

「たぶん、菜々子さんの言うとおり、初めての大会で、緊張しちゃってみたいです。それに——必要以上に結果を意識しちゃっていたのかも」

特に有香は中学時代は体育会系だった。スポーツは勝ち負けがはっきりつくものが多い。有香がその感覚でいたとしても、不思議ではないと思う。
「なるほど、ね」
菜々子が納得したような顔を見せる。
「だから、私、前に菜々子さんから聞いたこと、有香ちゃんに話したんです」
「何？」
「勝負は関係ない。楽しく歌うことが一番大事だって」

＊　＊　＊

大会当日。県庁所在地にある県民ホールが、今回の大会の舞台だ。
舞台袖で、有香は大きく深呼吸をする。
——大丈夫。うまくやれる。
昨日だって、一昨日だって、普通に歌えた。
楽しく歌うことが大事。
たぶん、初めての大会で、自分が意識しないところで力が入ってしまっていたのだろう。
今となってはそう思う。うまく歌わなくちゃ。そう考えすぎていたのかもしれない。
「緊張しすぎないようにね」
隣に立つ菜々子が囁く。

「大丈夫です」
有香も小声で答えた。自然と笑顔がこぼれる。
今までの練習の成果を発表するつもりで。結果はそれに付随するものに過ぎない。
それがわかったから。
「十六番。優華女学院高等部合唱部。ウィリアム・バード作曲、三声のミサより、キリエ、グローリア」
アナウンスが入る。
いよいよだ。
これが、このメンバーで歌う最後の機会。
客席はほぼ満員だった。指揮者である相澤先生が客席に向かって礼をすると、拍手がわき起こる。拍手が静まり、先生が合図をする。
有香は肩幅に足を開き、歌う姿勢を作る。
ソプラノのひかりが、音を取りにピアノへと向かう。流れる和音。自分の音を覚える。
――大丈夫。
このときのために、一生懸命練習してきた。その成果を見せるだけ。
勝負は関係ない。楽しく歌うことが一番大事なのだから。
息を大きく吸い込む。
最後の演奏を最高の演奏で締めくくれれば――幸せだ。

＊　＊　＊

「金賞おめでとう」
　相澤先生がにっこりと笑う。
　結果発表が終わり、ホールの外に集合。他の学校も同じらしく、制服をきた団体をあちらこちらに見ることができた。
　ある程度まとまった数がいる団体は貸し切りバスで来ているようだけれど、有香たちはこれから鉄道を利用して帰ることになる。
「ここ数年で最高の結果じゃない？」
　金賞は上位の五団体に送られる。結果も発表されていて、各審査員がどのような順位をつけたのかもわかるようになっていた。
　優華女学院高等部合唱部は、三位。
　何より嬉しかったのは、三人の審査員のうち、一人だけ、一位をつけてくれた人がいたこと。
　今日参加した約三十の団体の中で、有香たちの演奏を一番素晴らしいと思ってくれたひとがいたのだ。それだけで嬉しい。
「部長。何かあったらどうぞ」
　相澤先生が話を振る。
　菜々子は一礼をすると、一歩前に出た。
「これまで頑張ってきた結果が出たと思います。今日の演奏は本当に最高でした。みんな、ありがとうございました。私たち三年は今日で引退ですけど、最後にいい演奏ができて、

本当によかったと思っています」
　ぱちぱちぱち、と拍手がわき起こる。
「じゃあ、これで――」
　相澤先生が場を締めようとする。割り込んだのは、二年の木浦だった。
「ちょっと待ってください！」
　相澤先生が微笑む。この流れが、毎年お約束らしい。プレゼントを用意する都合上、ある程度有香も聞いていた。三年生もわかっているらしく、それほど驚いた顔はしていない。
「今日までがんばってくださった先輩方にプレゼントがあります」
「ほら」
　金澤が有香たちに合図をする。ひかりが、バッグにしまっていたプレゼントを取り出した。ピンク色の包装用紙に赤いリボンがついている。
　有香が菜々子に、ひかりが若菜にプレゼントを渡す。土曜日に二人で一生懸命選んだプレゼントだ。
「今までお疲れ様でした」
「ありがとう」
　二人がプレゼントを受け取ると、木浦が早速声を出す。
「あけてみてください！」
　三年生二人はこくりとうなずくと、包装用紙に手をかける。何を買ったか知らない二年生は、興味津々といった顔つきで、三年生の手元を見ている。
（喜んでくれるかな）

大丈夫、だと思う。ひかりと一生懸命探したプレゼント。一目惚れに近かった。
きっと、気に入ってくれるはず。
出てきたのは、楽譜モチーフのフォトフレームだった。右下には大きな八分音符が飾られている。
「うわあ」
声を上げたのは若菜だった。
初めてプレゼントを目にした木浦と金澤も口々に言う。
「いいのあったね」
「よく見つけたなあ」
「あら。本当に素敵ね」
相澤先生にも評判は上々のようだ。
「ありがとう。ひかり。酒井さん」
菜々子が微笑む。
有香はひかりと顔を見合わせて笑った。
「喜んでくれてよかったね」
ひかりが笑いかける。うん、と有香は大きくうなずいた。喜んでいる先輩たちを見ていると、有香も嬉しくなってくる。諦めずに探してよかった。
「はいっ」
若菜が勢いよく手を上げた。
「この写真立てに飾れる写真撮りたい！　あたし、デジカメ持ってるし」

一番最初に反応したのは木浦だった。
「賛成！　部長は」
「私も賛成」
「じゃあ、みんな並んで。私がシャッター押すわよ」
「だめですよ。先生も一緒じゃないと。その辺のひとにシャッターはお願いします」
若菜はかけていき、近くの女子高生を捕まえる。どうやら快く引き受けてくれたらしい。
若菜は大きくこちらに向かって、まるの合図を送った。
「ほら、並びましょう。先輩たちは中心で」
二年の木浦がてきぱきと指示を始める。
三年生を中心に、一列に並ぶ。
「じゃあ、行きますよ」
カメラを持った女子高生が声をかける。
「はい、チーズ」
フラッシュが光った。

——この日のことを、きっと有香は、一生忘れないと思う。

ターニング・ポイント
諸星崇
Illustration: 橘ぽん

あらすじ

ヒロキはこれといってやりたいこともない、平凡な高校生。高校入学を機に始めたアルバイト先で、ダンサーを目指すヤヨイと出会う。

曲者ぞろいのバイトの先輩たちにも囲まれて、なんでもないヒロキの毎日が、少しずつ転換点に向かっていく。

ヤヨイ

私立優華女学院高等部の三年生。ダンサー志望で、アルバイトの合間に練習にはげむ。無口で、感情表現が小さい。

ヒロキ

市立中央高校の一年生。高校入学を機に駅前のショッピングモールでアルバイトを始める。ごくごく平凡な少年。

第5話　それぞれのグッド・バイ

1　退職届

そのとき、ヒロキは待機室でクリーナーの分解清掃をしていた。

フロアの床をみがくための、業務用の大型電動クリーナーだ。ヒロキもバイトを始める前は、閉店間際にスタッフが使っているのを何度か見たことがある。

その頃は、まさか自分がこれを分解するようなことになるとは夢にも思わなかったのだが。

「でかいプラモデルだと思えばいいよ。ネジ回せば、勝手に分解されてくし、電気抜いときゃ感電もしないから。手順はマニュアルに書いてある。じゃ、よろしく」

イケタニにあっさり言われて、人生初の大型電化製品の分解に取りかかったのが一時間ほど前。それから四苦八苦して、ヒロキはどうにかメインタンクを取り外すところまでこぎつけた。

メカニックでバイトを始めて半年近く。ヒロキの仕事はもう見回りだけではない。脚立に乗って天井やインテリアの清掃もするし、壁の傷の補修もやった。工具や薬剤も少しはあつかったことがある。

もっとも、それらのときには必ず先輩が一緒にいた。仕事を教えてもらいながらのことで、ヒロキが一人でやったことはない。

今日は初めて、ヒロキ一人で大がかりな仕事をこなすことになったのだ。

「あれ？」

変な手応えを感じて、配管のボルトを回す手が止まった。スパナが空回りする。何度か試すが、ボルトは一向にゆるまない。

マニュアルを見てみたが、原因はわからなかった。内容が英語というのもたまらない。ヒロキの成績で英語の専門書と格闘するのは、不戦敗も同然だ。

困った。タンクを外さないと、内部の清掃もなにもない。ここが一番汚れているのだから。

ヒロキの眉がハの字になったとき、待機室の扉が開いた。

「おつかれさまです。あれ、ヒロキ、一人？」

「あ、ムロフシさん。おつかれさまです」

私服のムロフシが入ってきた。作業服姿のヒロキと、床に散らばった部品、そして鎮座するクリーナーをしげしげとながめ、ムロフシは状況を理解する。

「分解清掃？　タンクが外せない？」

ずばりと言い当てられて、ヒロキは目を丸くした。ムロフシが小さく笑う。

「なつかしいな。僕も最初はできなかったよ。メカのバイトがまずぶつかる壁だね。それは裏側にもナットがついてるんだ。そっちもスパナで押さえないと、ネジごと永久に回って取れない」

言われたとおりに裏側をのぞくと、ナットが見えた。たしかにこれを固定しないと、ヒロキが回しているボルトと一緒に回ってゆるんでくれない。

しかし、これはこれで問題がある。

「手、入らないんですけど」

「スパナが入ればいいでしょ。すき間に突っ込んで、あとは少しずつ回すんだよ。見えないけど、そこは指の感覚で判断する」

なんだか超能力のようなことを言われてしまったが、事実だ。見えない場所は手先で見ろと、イケタニにも言われた。メカが手を突っ込むところは、必ずしも目が届くとは限らない。

なんとかスパナをねじ込んで、ボルト回しを再開する。何度か手がすべってスパナを落としてしまったが、二本目、三本目と続けるうちにコツがわかってきた。

四本目はスパナを落とすことなく、外せた。タンクの固定がなくなり、ヒロキの手にずしんと重みがかかる。

慎重に床に下ろすと、ムロフシが小さく手を叩いてくれた。

「ありがとうございます、ムロフシさん。ところでどうしたんですか？　今日、休みですよね」

「うん、ちょっとね。イケタニくん、いる？　それかヒトツモリさん」

「ヒトツモリさんは夜勤です。イケタニさんはさっき事務室に行きました。そういえば、けっこう長いですね」
　クリーナーの清掃を言いつけられてから、イケタニは待機室に戻ってきていない。正社員なので事務仕事に集中することもあるが、今日は特にそういう予定は聞いていなかった。
　一時間以上も待機室にヒロキ一人にしているのはめずらしい。と思ったとき、ちょうど当のイケタニが帰ってきた。
「お、ムロやん。どうしたの？」
「おつかれ。ちょっと報告というか」
　気安いイケタニの言葉に、ムロフシはどこか緊張したような顔で答えた。
　歳の近い二人は、普段からよく冗談を言い合う。けれど、今日はなにかそんな空気ではなかった。
　ムロフシの肩が大きく上下する。そして、声が聞こえた。
「仕事の関係で東京に行くことになった。だから、来月いっぱいでメカをやめさせてください」
　ヒロキは、ムロフシの言葉がすぐには理解できなかった。
　イケタニがどこか引きつった笑いを浮かべる。
「マジか。ムロやんもか」
「も？」
「クスダさんも今、来てたのよ。同じ理由で」

「ええっ⁉」

　思わず大声が出て、ヒロキは立ち上がった。ムロフシだけならまだしも、クスダもやめてしまうとは思いもよらなかったことだ。

　ムロフシもおどろきに言葉を失っている。

「カメラの仕事で、クスダさんは海外行くんだって。それは一ヶ月くらいで帰ってくるみたいだけど、その先は事務所でいそがしくなりそうなんだってさ。やっべぇな―。どうしよ」

　そこまでイケタニが言ったとき、待機室の電話が鳴った。

　イケタニはひとまず二人を制し、受話器を持ち上げる。

「もしもし。お、カワナさん。正社員申請、どうだった？」

　カワナからの電話のようだ。先日、正社員になる申請を出していた。それについての連絡らしい。

　いくつかイケタニが質問する。カワナの声は聞こえない。が、その後、イケタニの顔が固まった。

「は？　転属？　マジで？」

　不穏な単語がヒロキの耳に飛び込んでくる。転属とは、転勤と同義だ。すなわち、この店を離れるということになる。

　それからイケタニは二言、三言、カワナと話した。ゆっくりと受話器を置く。

　そこには半笑いになった顔があった。

「おいおい。マジですか。すごいことになっちゃったな」

イスに腰かけたイケタニは、手にしていた書類を机に置いた。身振りでうながされ、ヒロキはそれをのぞき込む。
『メカニック社員の配置転換について』
冒頭の一行にそう書いてあった。

2　気のゆるみ

「それじゃ、みんな、やめちゃうの？」
ヤヨイの青ざめた顔は、ヒロキの心情を映す鏡のようだった。
いつもの駐車場の片隅。いつものように練習しているヤヨイ。休憩時間をむかえたヒロキの足は無意識にそこに向かっていった。
ヒロキの姿をみとめたヤヨイは、表情をゆるめて手を振ってくれる。しかし、ヒロキがかかえる話を聞くと、その顔はすぐさまくもってしまった。
「クスダさんとムロフシさんはそうみたいです。イケタニさんとヒトツモリさん、カワナさんはやめるわけじゃないですけど」
「でも、この店からはいなくなっちゃうんだ」
ヤヨイは見るからに落ち込んでしまっている。彼女とメカニックの先輩たちとのつき合いはヒロキより長い。

しかも、ヤヨイは人づき合いが苦手で、学校にもバイト先にもほとんど友達がいない。イケタニたちは、そんな中でヤヨイに親しくしてくれた数少ない人たちなのだ。

彼女もヒロキも同じくらい、ショックを受けているだろう。

「なんか、急すぎて。まだ信じられないんです」

「うん。わたしも、なんだかとまどってる」

友達が突然、転校するときの感覚に似ている。それまでの日常が唐突に終わってしまう喪失感。それも、五人も一度に。頼りにしていた先輩たちがそうなるということが、ヒロキにはまだ理解しきれない。

「こういうのは、一つ動き始めると重なるんですって」

みんながそれぞれの事情でメカニックを離れることになる。それは純粋に単なる偶然だ。けれど、その偶然はなぜか重なるのだという。

ヒロキにはわからない。イケタニもうまく説明できないようだった。ただ、そういうものだと。

ヒロキより長く生きて、多くわかれを経験しているからわかる、そういう感覚なのだそうだ。

「メカ、どうするの？」

「もちろん新しくバイト募集はかけてますよ。本社からもべつの社員さんが来るみたいです」

ヒロキ一人になって、メカニックが回るはずがない。イケタニはすぐにスタッフの募集を申請し、本社にも人員の配置を確認した。

イケタニ、ヒトツモリに代わる正社員も配属されるし、新しいアルバイトも募集する。人数は今と同じか、少し多くなるだろうということだ。

けれど、当然のことだが、それはヒロキの知っている先輩たちではない。メカニックはまったく新しい人による、まったく新しい空間に変わるだろう。

そのことにヒロキの気持ちはついていけない。

「本当は、おめでたいことなんだって言われました」

「え？」

「クスダさんもムロフシさんも本業がうまくいったわけだし、カワナさんも正社員になる。イケタニさんトヒトツモリさんも昇進につながる異動なんだって」

イケタニはそう言った。メカニックの全員が、今より高い位置に行くためのステップなのだと。

クスダもムロフシも、メカニックにはアルバイトだ。二人とも、映像関係と作家という目指す道がある。その道が開けたらメカニックを離れる。それは以前から言っていた。

カワナは準社員から一歩前に進むことを選んだ。理由は収入だと冗談めかしていたが、準社員という半端な立場に我慢ができなくなったのだろう。彼なりの挑戦だと言ったのは、誰だっただろうか。

イケタニとヒトツモリは主任になるための前段階で、べつの店舗で経験を積むことになるらしい。これも二人にとっては大きなチャンスだ。

イケタニの言いたいことはわかる。ヒロキも本当は、みんなにおめでとうと言いたい。けれど、それで今のメカニックのチームがなくなってしまうのはいやなのだ。

会社の都合とか、仕事の都合とか。そういうどうしようもない理由であることはヒロキにだってわかる。それでも受け止めきれない。

それはヒロキが子どもだからなのだろうか。

ヤヨイに聞いてみようかと思った。だが、不安定にゆれる目を見ていると、とても切り出せなかった。

「そろそろオレ、戻ります」

「うん。お仕事、がんばってね」

結局、なにも言えずに事実を報告しただけになった。自分のもやもやも解消できないし、ヤヨイの動揺も打ち消せない。

こんなことで大丈夫なのだろうか。漠然とした不安が、ヒロキの背中にのしかかっていた。

「戻りました」

「おかえり。よし、始めよっか」

待機室に戻ると、イケタニとヒトツモリが待っていた。

メカニックの面々がいっせいに店を離れるとわかってから、ヒロキのシフトはこの二人と一緒になることが増えた。

「僕らがいなくなったら、どうしたってヒロキがメカの中心になる。そのときまでに、できるだけのことは仕込んどくから」

それがイケタニの語った理由だ。正社員の二人にはスタッフの育成という仕事がある。今まではカワナが中心になってヒロキに仕事を教えてくれたが、これからはイケタニたちが代わることになった。

つまり、この二人しか教えられない高度な部分にふみ込むというわけだ。

「事務仕事は社員がやるからいいけど、現場は仕切れるようになってもらわんとね」

ヒトツモリからもさらりとプレッシャーをかけられる。ヒロキはあいまいにうなずいた。まだそこまで頭が回っていない。自分が現場を仕切るなどと言われても、想像がつかないのが正直なところだ。

「んじゃ、まずはゲーセンの応援に行きますか」

ヒトツモリにうながされ、ヒロキはショッピングモール内のゲームコーナーに向かった。今日はヒトツモリが指導役のようだ。

「メダル系のが一つ止まったらしいから、ちょっといじろうかね」

「わかりました」

ゲームの筐体の修理もメカニックの仕事だ。ネット対戦に対応しているような最新機器はメーカーに依頼するが、簡単な構造のものならメカニックが対応する。

壊れたのは中につめ込んだ駄菓子を機械じかけのスコップですくい取るタイプの筐体だ。スコップの先端が割れてしまったため、交換することになった。

ヒロキはゲーム筐体にふれるのは初めてだが、そこまで難しい作業ではない。それにヒトツモリもいる。

ヒトツモリは軽い言動も目立つが、とても面倒見のいい性格だ。仕事の教え方もうまい

し、頼れる兄のように感じる。なにかあっても大丈夫だろう。

土曜の午前ということもあって、ゲームコーナーはけっこうにぎわい出している。ただ、故障中の張り紙がされた筐体の近くにはさすがに人影は見られなかった。

「まず、電気を抜く。これは絶対に忘れないこと。それから作業開始。鍵はこれね。じゃ、やってごらん」

予備部品と工具、筐体の鍵を渡されたヒロキは、さっそく作業に取りかかった。

基本は他の機械の修理と変わらない。割れてしまったスコップを取り外して、新しいものをもとどおりに取りつけるだけだ。

ヒトツモリはヒロキの手元をじっとのぞき込んでいる。が、手も口も出さない。不安になって目を向けたが、特になにも言われなかった。

まちがっていれば、さすがに指摘があるだろう。気を取り直してヒロキは作業を進める。スコップを交換し、ふたをしめ、鍵をかけ直してスイッチを入れる。ランプが点灯し、軽快な音楽が流れ出した。

何回かテストで動かして、異常がないことを確認する。これで終了だ。ヒロキは額の汗をぬぐった。

と、ヒトツモリがフロアの片隅にいる親子のほうに小走りにかけ寄った。

「すみません、お客さま。お待たせしました。修理のほう終わりましたので、どうぞお楽しみください」

そう言って、親子づれを案内してくる。ヒロキはあわてて工具をまとめ、ゲームの前を空けた。小さな女の子が歓声を上げて筐体に取りつく。

それをぼんやり見ていると、ヒトツモリに肩を叩かれた。
「裏で話そう」
スタッフ用の通路へ向かう背中を、ヒロキはとまどいながら追う。作業ミスをした覚えはない。あれば、ヒトツモリが客をつれてきたりはしないはずだ。
扉を閉め、振り返ったヒトツモリは、いつになくきびしい顔をしていた。
「ヒロキ。まわりを見てなさすぎ」
指摘の意味が、ヒロキにはすぐにはわからなかった。
「今、何分かかった？ あと、何回俺のほうを見た？ わからないとこを俺に聞くのはいいよ。でも、最初から俺をあてにしたらダメ。そういうの、横から見てるとどう思う？」
ますますわからない。誰か、ヒロキのことを見ていた人がいるのだろうか。
「お客さんだよ」
その一言から一拍遅れて、ヒロキは背筋が寒くなった。
「お客さんからどう見えたか、それを意識した？ 俺たちは接客スタッフの制服じゃない。作業服だ。普通の人が見て、アルバイトだと思うか？ 機械の専門スタッフだと思うだろ。その人が不安そうに作業してたら、他のスタッフや店全体が信頼されなくなる」
そんなこと、考えたこともなかった。
メカニックも客の目にふれる場所で作業をすることはある。ヒロキもあった。照明の交換などは誰からも見える作業だ。
そういうとき、だらだらした姿を見せたり、まわりに危険がおよんだりすることがないようにとは、心がけてきた。

ヒトツモリが言うようなことは、接客のスタッフが気をつけることだと思っていたのだ。けれど、言われてみればぱちがうに決まっている。ヒロキだって客として来たのなら、接客担当とメカニックをわけて見たりはしない。

どちらも同じショッピングモールの従業員だ。

「もしかして、ヒトツモリさんが呼んできたお客さんって」

「そう。あの親子はこっちのほう、ちらちら見てたからね。作業が終わるのを待ってたんだよ。気づいた？」

もちろん、まったく気がつかなかった。冷静に考えれば、ヒロキが修理をしない限り、あのゲームはできない。それをやりたいと思っているお客さんには待たせることになる。

そんな簡単なことなのに、ヒロキには目の前の作業しか見えていなかったのだ。

「俺らはこの仕事で金もらってるんだ。ヒロキもだぞ？　バイトだからって変わるモンじゃない。お前もプロなんだから」

ヒトツモリの言葉が、ずしんと重くひびいた。

「プロ、ですか」

「プロだよ。ヒロキはプロだ。プロのメカニックだ」

真剣な目で言われる。いつも気楽そうにしているヒトツモリだからこそ、その言葉は重かった。

返す言葉が出てこない。そこへ、階段を足早に下りてくる音がした。

「お、モリちゃん。おつかれ」

「おー、イケタニくん。どうかした？」

イケタニに手を挙げてみせるヒトツモリは、普段の軽い調子になっていた。が、イケタニのほうはそれにつき合わない。
「悪い。緊急呼び出し。モリちゃんも来て」
理由は聞かない。ヒトツモリはすぐに結論を出した。
「わかった。行こう」
「あ、はい!」
走り出したヒロキは、二人から一歩も二歩も遅れていた。

3 プロフェッショナルの背中

ショッピングモールの中央ホールには大きな機械時計がある。高さ三メートルのガラス張りの箱で、中にはパイプやレールが複雑にからみ合い、その上をたくさんのボールが転がっていくという構造だ。
なかなかめずらしいので、待ち合わせの目印にされたり、見物人がボールの動きを追っていたりすることがよくある。特に子どもたちには人気だ。正午や三時には内部の人形も動き、ちょっとした名物になっている。
その機械時計の前にヤヨイが立っていた。
「お疲れ様です」

イケタニの声に、ヤヨイが振り返る。横にはフロアチーフの姿もあった。二人とも、メカニックの到着に一度安堵し、すぐに困った表情に戻る。
「お疲れ様です。機械時計が止まっちゃって」
指差されたところを見ると、ボールがレールの先でたまっていた。その先にある回転部分が動いていない。
「電気は通ってる。なんか引っかかってるか、折れてるな」
ヒトツモリがすばやく全体を見回した。電飾が点滅しているので、電源が入っていないということはないようだ。
イケタニはフロアチーフと情報を確認している。
「団体客が来るんじゃなかった？」
「はい。ボランティア団体のイベントで、子どもたちがたくさん」
「いつ？」
「三十分後には到着予定です」
イケタニとヒトツモリの顔がけわしくなった。
子どもたちのお目当てにはこの機械時計も入っているだろう。しかし、こんな大がかりなものを三十分で直せるのだろうか。
ヒロキはこの機械時計をさわったことなどない。そもそも、壊れることなど想定していなかった。
けれど、今はそんなことを言っている場合ではないのだ。
「チーフとヤヨイちゃんはお客さんの対応して。二十分ちょうだい。その間になんとかす

るわ」

イケタニが腰につけた鍵束を引っ張って、機械時計の扉を開ける。皮手袋をつけたヒトツモリがすぐに続き、ヒロキもそれにならった。

フロアチーフはインカムで連絡を取り、ヤヨイは近づきそうな客を止める。イケタニとヒトツモリは、外の様子に目もくれなかった。

「時間がない。僕が右、モリちゃんは左。ヒロキも気づいたことがあったら言って」

そう言ったときには、イケタニはもう近くのパイプを点検している。ヒトツモリは背中を向けて、ボールの行く先を指でたどっていた。二人とも、まばたき一つしない。

「ブラケットが折れてるけど、関係ないな」

「こっちはひび入ってるわ。一回、総点検したほうがよさそう」

ヒロキが雰囲気に飲まれている間に、二人は小さな異常を発見した。ボーっとしているわけにもいかない。ヒロキもあわてて目をこらした。

ヒロキにはイケタニやヒトツモリのような観察眼はない。それでも、これまで基礎は教えてもらった。なにかわかるかもしれない。

少なくとも、突っ立っているよりは役に立てるはずだ。

時間は待ってくれない。こうしている間にも、この時計が動くことを楽しみにしている人たちがいる。

ヒロキの集中力は、経験したことがないほど高まっていた。

「……？　あれ、おかしくないですか？」

ぽつりと口をつく。視線の先で一ヶ所、シャフトが空回りしていた。止まっている部分

からは遠いが、空回りしているのは明らかにおかしい。
　イケタニとヒトツモリの目が、同時にヒロキの視線を追う。空中に指がおどり、動力の伝達系をなぞった。
「それだ、ナイス」
「やすりと金のこ、あとベアリング。グリスも缶ごと」
「了解。ジャッキも持ってくる」
「チーフ。ここの電気、止めて！」
　一気に時間が進み始めた。ヒトツモリが時計の中から飛び出し、イケタニはヒロキの持ってきた工具を取って作業にかかる。一瞬の無駄もない。
　ヒロキも時計の外に出た。入れ替わりにヒトツモリが戻ってくる。正社員の二人はわずかな言葉を交わしただけで、すぐに役割分担を終えた。
　イケタニの手がすごい速さで動き、外したネジや部品がヒトツモリの手に渡る。ヒトツモリはそれをなくさないように並べ、工具や交換部分をイケタニの手に絶妙のタイミングで戻す。
　その動きのあざやかさに、ヒロキは思わず目をうばわれていた。
「よし、ＯＫ！」
「かたづけよう」
　言うが早いか、イケタニとヒトツモリが手当たり次第に工具をまとめる。今度は早さ優先だ。とにかく工具箱に放り込んで後始末にかかる。
　先に工具箱を持ったヒトツモリが外に出た。忘れ物がないことを確認して、イケタニも

出てくる。フロアチーフを呼ぶと、手短に報告を終えた。
「終わり。戻るよ」
うながされ、ヒロキは待機室に続く扉を開けた。背中から子どもたちの歓声が聞こえる。どうやら間に合ったらしい。
けれど、誰もイケタニとヒトツモリに声をかけない。作業を見ていないのだから当然だ。当然なのだが、釈然としないヒロキにイケタニが言った。
「お客さんからお礼を言われるためにやってるんじゃないの。これが僕らの仕事なんだから。感謝されようがされまいが、僕らがやらなきゃいけないこと」
「だから、これはボーナス」
ヒトツモリが肩をすくめる。その向こうにヤヨイがいた。
「ありがとうございました、みなさん」
「いいって。それより接客に戻ってあげてよ。チーフ一人じゃ大変だからさ」
「はい、それじゃ」
ヤヨイはもう一度頭を下げて、フロアに走っていった。
「やることをやれば、認めてくれる人がいる。けど、それを目当てに働くんじゃない。順番をまちがえないこと。いいね」
イケタニにポンと頭を叩かれる。扉が閉まって、二人が直した機械時計は見えなくなった。
「けど、今回は反省だな。僕らだけでやっちゃったし」
「そうね。ヒロキにも教えなきゃいけなかった。いつかはあれの修理もしなきゃいけない

んだから」
　待機室に向かいながら、イケタニとヒトツモリが言葉を交わす。ヒロキはそこに疑問をはさんだ。
「先輩たちは、前にもあの時計を直したことあるんですか？」
『まさか』
　声をそろえて二人は笑った。
「あんなモン、部長とかに聞かないと直せないよ。部品は一応、置いてあるけど。本格的な修理になったらはっきり言ってお手上げ」
「まあ、だからって放っとくわけにもいかんでしょ。言ったろ？　プロなんだから」
　こともなげに言われてヒロキは返す言葉を失った。
　二人は初めての事態に、あんなに落ち着いて対処したのだろうか。これがヒロキ一人だったらどうなるのか、不安がもたげる。
　それが顔に出たのか、イケタニが苦笑した。
「なんて顔をしてるの。今日、トラブル箇所を見つけたのはヒロキだろ？　できるんだよ。ヒロキもちゃんと経験を積んでるんだから」
　それは気休めでもなんでもない、イケタニの本心からの一言だった。
「意味もなく、半年バイトしてきたわけじゃない。その間に知識は勝手に身についてる。あとは使い方。それを今、僕らが教えてるだけ」
　だから、ヒロキの中には不安を上回る小さな自信が芽生えた。
「今度、ちゃんと直さないといけないだろうから、そんときはヒロキも手伝って」

「はい。オレ、もっと勉強します」

「その意気」

笑う背中の大きさを、ヒロキは改めて感じる。そして、そこに少しでも近づきたいと思った。

心の中の不安は消えない。それでも見える背中に、プロという言葉に、ヒロキは近づくための足をふみ出すことをおそれなかった。

『Dear My Life』貴水玲

今回のお話で、主人公の花は今まで頑張ってきたご褒美を貰います。花を目の敵にしてきたありさは自分の非を認め、ぎこちなかった二人の関係は雪解けへ向かうのです。そして、母である咲は花の父親と花への偽ざる想いを口にします。その想いは金銭目的の結婚を疑っていた花を安心させてくれるのです。

そして、花の恋の物語も大きく動こうとします。花が密かに想いを寄せる星流。彼が花に近づいた目的とは何だったのでしょうか？　好きだから知りたい、好きだから知ってほしくない。二人の切ない想いが交錯していきます。

『Ｆｒｏｍ・Ｎ』番棚葵

幼なじみの来夢に巻き込まれて、隆也はしぶしぶ町おこしを手伝います。ですが、町おこしをしていくうちに一番変わっていくのは隆也です。嫌っているはずの故郷の良さを知り、幼なじみでしかない来夢への淡い恋心と戸惑いが生まれていきます。そんな彼の成長を見れば楽しんで貰えるはずです。この物語を読めば、隆也同様にあなたもゆったりと時間が流れるＮ市の良さが見えてきます。

今回町おこしをするのは喫茶店です。喫茶店を営む家族とのふれ合いで、二人は町おこしとは少し違う方向で家族を助けようとします。二人はどんな方法で喫茶店を救うのでしょうか？　二人の奇想天外な解決手段も見所のひとつです。

『**響け、私たちの歌声**』広野未沙

第二志望の高校に入学した有香は入学当初、学校に馴染めずにいました。しかし、友人のひかりの誘いもあって、自分の居場所を求めて合唱部に入部するのです。部活に馴染んでいった彼女ですが、みんなで作りあげていく合唱に自分が不要だと感じ始めます。有香を心配したひかりによって、彼女は歌うことの本当の意味を知るのです。

今回合唱部一同はアンサンブルコンテストに挑戦します。結果も気になるところですが、卒業していく先輩のためにがんばる有香が最大の見所になるでしょう。彼女の頑張りは見事に空回りします。しかし、こんな失敗は誰にでもあるはずです。読んだあなたは『がんばれ』と健気な彼女を、きっと応援したくなります。

『**ターニング・ポイント**』諸星崇

ショッピングモールで個性的な先輩に囲まれながらも、楽しく過ごしていた主人公のヒロキ。そんな時、バイト先の先輩たちは転勤や自分の夢を追うために職場を離れていきます。どんどん変わっていく周りの人間達を見て、主人公ヒロキは焦燥感を感じるのです。現場を離れる先輩たちはヒロキが現場を仕切れるように技術を叩きみます。彼が得たのは技術ではありません。大人になるための厳しさなのです。

少年が男に変わっていく瞬間を垣間見ることができる物語になっています。やりたいことが見つからず、焦っているあなたにこそお勧めしたい物語です。

槙尾慶祐

2011年10月12日　発行

著　　　者　貴水玲／番棚葵／広野美沙／諸星崇

企画・監修　榎本秋

発　行　所　株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12　ファミール光が丘102
電話　03-6750-6341

表　　　紙　神内みさと（AMG出版工房）

イラスト　井上真紀子、ヒトエ、伊藤由希、うらら、橘ぽん
（すべてAMG出版工房）

協　　　力　脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンの配布、複製は不許可とする。